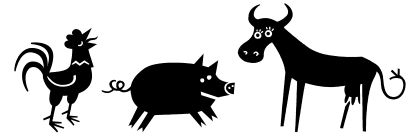


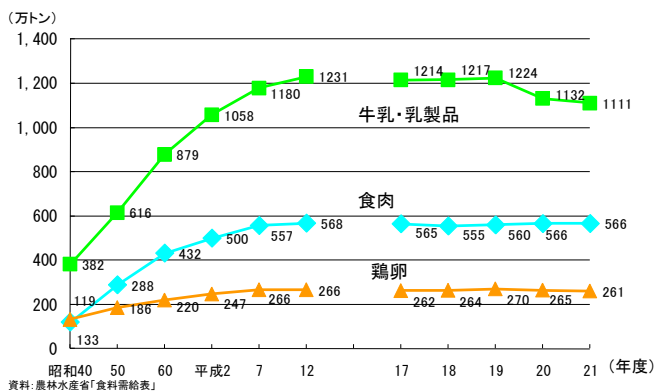
# 畜産物の需給動向



## ◆概況

21年度の畜産物の需要量は、牛肉が前年をわずかに上回る

図1 畜産物の需要量

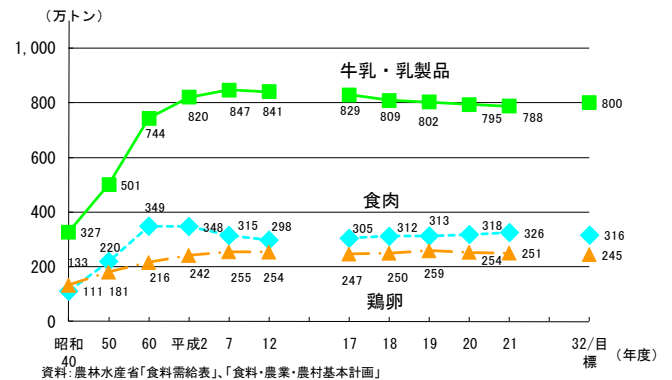


畜産物の需要量は、牛肉が前年度比2.5%増と2年ぶりに前年度を上回ったものの、豚肉は輸入量の減少から同2.1%減となった。鶏肉は景気低迷による消費者の低価格志向により同1.5%増と2年連続で上回った。

また、「食料・農業・農村基本計画」(22年3月閣議決定)においては、32年度における1人当たり年間消費目標として、生乳が89キログラム、牛肉5.8キログラム、豚肉12キログラム、鶏肉11キログラム、鶏卵17キログラムを見込んでいる。

一方、21年度の実績(概算値)では、牛乳・乳製品が84.8キログラム(うち飲用32.7キログラム、乳製品51.9キログラム)、牛肉が5.9キログラム、豚肉が11.5キログラム、鶏肉が11.0キログラムとなった。

図2 畜産物の生産量

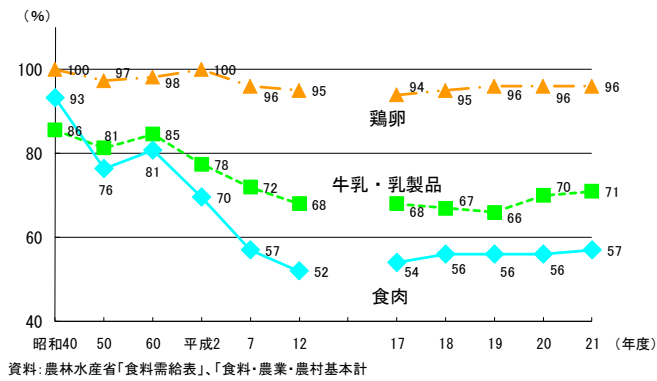


畜産物の生産量について見ると、牛肉は20年度に前年度を1.0%上回ったが、21年度はほぼ前年並み。豚肉は衛生対策による事故率低減などから20年度に同1.1%上回り、21年度においても同4.6%上回った。鶏肉は根強い国産志向に加え景気の低迷により安価な鶏肉の需要が高まったことから、20年度に同2.4%、21年度においても同1.3%といずれも前年度を上回った。

鶏卵の生産量は、20年度に前年度を2.0%下回り、21年度も同1.2%下回った。

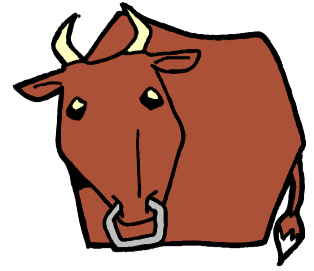
牛乳・乳製品の生産量は、20年度は同1.0%下回り、21年度も同0.8%下回った。

図3 畜産物の自給率の推移



食肉の自給率は、18年度以降56%と横ばい傾向で推移していたが、21年度は57%と1ポイント上昇した。このうち、牛肉は17年度以降43%、20年度は1ポイント上昇の44%となったが、21年度は再び43%と1ポイント減少した。豚肉は18年度以降52%であったが、21年度は55%と3ポイントの上昇となった。鶏肉は18年度以降69%であったが、20年度は1ポイント上昇し70%となり、21年度は前年水準を維持した。

牛乳・乳製品は20年度は輸入量が大幅に減少したことから前年度を4ポイント上回る70%で推移し、21年度は1ポイント上昇の71%と2年連続の上昇となった。

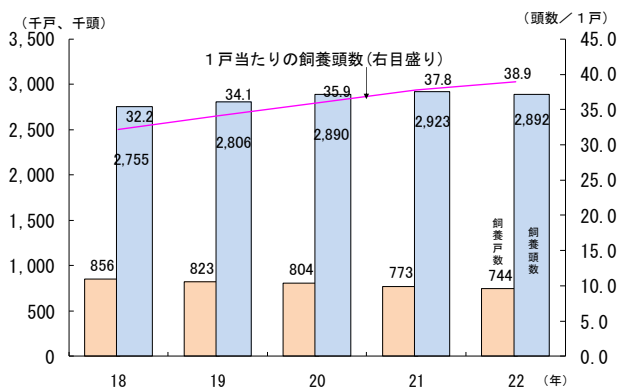


# 牛肉

## ◆飼養動向

22年2月の肉用牛の飼養頭数は、交雑種の減少により289万頭（▲1.1%）

図1 肉用牛の飼養戸数および飼養頭数



資料：農林水産省「畜産統計」

注：各年2月1日現在

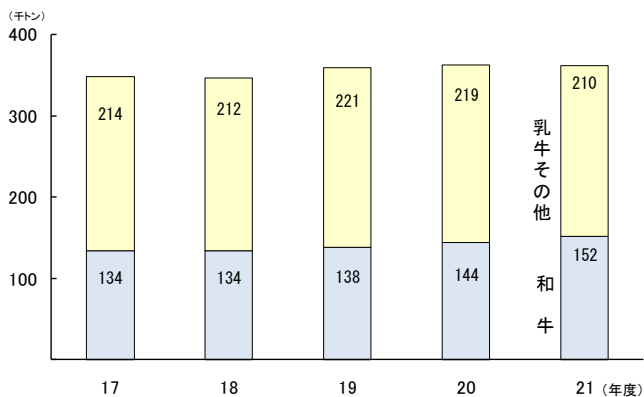
肉用牛の飼養動向を見ると、肉用種は18年まで前年並みの水準であったが、19年以降は増加傾向で推移している。交雑種を除く乳用種は17年以降、減少傾向であったが、6年ぶりに増加に転じた。交雑種は、18年以降増加傾向で推移していたが、22年は前年よりかなり大きく減少した。この結果、22年の肉用牛の総飼養頭数は、2,892千頭（▲1.1%）と6年ぶりの前年割れとなった。

飼養戸数は、高齢化による廃業により、22年には744千戸（▲3.8%）となった。一方、1戸当たりの飼養頭数は38.9頭（5.3%）と規模拡大が着実に進んでいる（図1）。

## ◆生産

21年度の生産量は、36万2千トン（▲0.3%）と3年ぶりに減少

図2 牛肉の生産量



資料：農林水産省「食肉流通統計」

注1：部分肉ベース、注2：乳牛その他には、乳牛の他外国牛等を含む

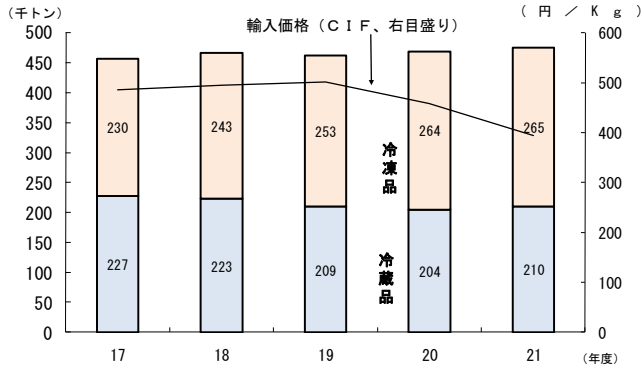
牛肉の生産量は、3年ぶりに減少し362千トン（▲0.3%）となった。このうち交雑種は、乳用牛への黒毛和種の交配比率（延べ人工授精頭数に占める黒毛和種授精牛の割合）が19年まで上昇したことから生産量も増加し、21年度は、98千トン（5.1%）となった。加えて、和牛も152千トン（5.5%）の増加となった（図2）。

しかし、乳牛が181千トン（▲14.1%）と減少幅が大きかったことから、全体で前年度をわずかに下回った。

◆輸入

21年度の輸入量は、47万5千トン（1.2%）と前年をわずかに上回る

図3 牛肉の輸入量

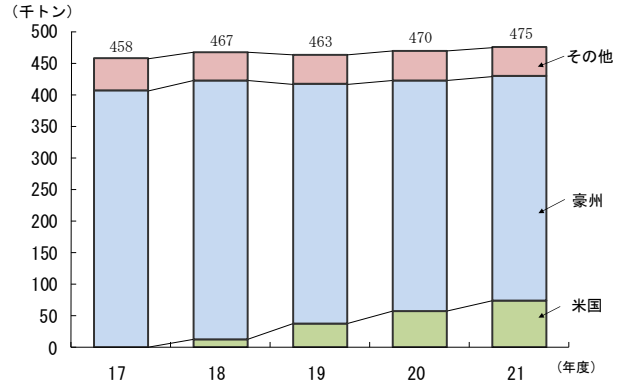


資料：財務省「貿易統計」  
注1：冷凍品にはかず肉等を含む。  
2：部分肉ベース

牛肉の輸入量は、17年度以降は19年度を除いて増加傾向で推移し、21年度は米国産の大幅増加などから475,426トン（1.2%）とわずかに増加した（図3）。

BSEの発生による一時停止から再開された後は増加傾向にあり、21年度は73,823トン（30.9%）と前年度を大幅に上回った。このため、輸入牛肉の約8割を占める豪州産は

図4 牛肉の国別輸入量



資料：財務省「貿易統計」  
注：部分肉ベース

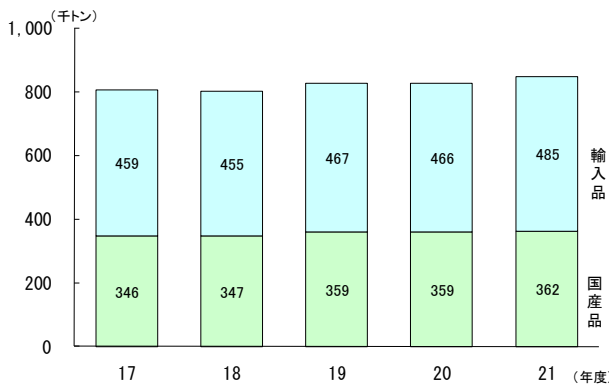
355,488トン（▲2.8%）、ニュージーランド産についても26,940トン（▲4.4%）と、ともに3年連続で前年を下回った。一方、カナダなどその他の国は、19年度以降増加傾向で推移していたが、21年度は減少に転じ9,526トン（▲9.3%）と前年をかなりの程度下回った（図4）。

◆消費

21年度の推定出回り量は、輸入品が増加も国産品は前年並み、合計で84万6千トン（2.6%）

推定出回り

図5 牛肉の推定出回り量

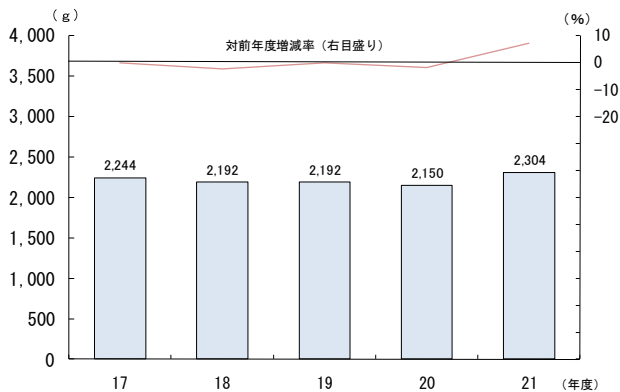


資料：農林水産省「食肉流通統計」,財務省「貿易統計」,農畜産業振興機構調べ  
注：部分肉ベース

牛肉の推定出回り量は、19年度は米国産牛肉の輸入再開などを背景に増加に転じた。19年度以降は増加傾向で推移し、21年度は84万6千トン（2.6%）と3年連続で前年度をわずかに上回った（図5）。

## 消費

図6 牛肉の家計消費量(1人当たり)



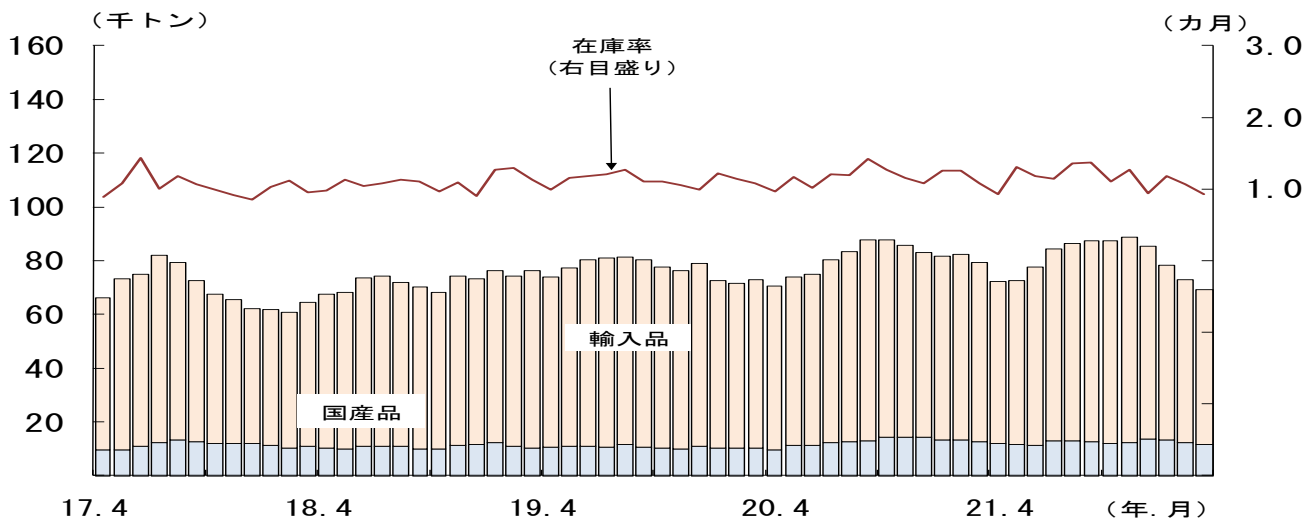
資料：総務省「家計調査報告」

牛肉需要量の3割を占める家計消費は、15年度以降おおむね減少傾向で推移し、20年度は景気の後退に伴う消費の減退などから、前年度をわずかに下回った。しかし、21年度は、引き続き景気の低迷による低価格志向などを反映して小売価格が低下したため、牛肉の値ごろ感が高まったこと、内食化が進展し、消費者が購入する機会が増えたことなどにより、2,304グラム(7.2%)と前年度をかなりの程度上回った(図6)。

## ◆在庫

## 21年度期末在庫は、国産品、輸入品とも減少

図7 牛肉の推定期末在庫量と在庫率



資料：農畜産業振興機構調べ

注1：在庫率＝在庫量／推定出回り量

2：部分肉ベース

期末在庫量は、17年度以降は増加傾向で推移し、19年度にはいったん下回ったものの、20年度は再び増加に転じ79,254トン(8.8%)となった。21年度は輸入品の出回りが増加し在庫が減少したことから、全体では69,071トン(▲12.8%)と前年度をかなりの程度下回った。

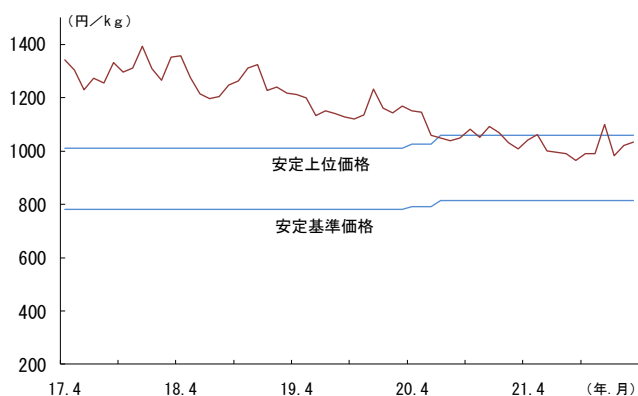
また、低価格志向に伴い販売がおもわしくないロイン系が増加しているともいわれており、部位別の在庫バランスがかなり崩れている(図7)。

前年度末に比べ、輸入品は▲13.7%、国産品は▲8.3%とともに減少し、在庫率は約0.91ヵ月となった。

## ◆国産枝肉卸売価格(東京・省令)

21年度の卸売価格は、1,015円/kg(▲5.1%、東京・省令)と4年連続前年度を下回る

図8 牛肉の卸売価格(東京・省令価格)

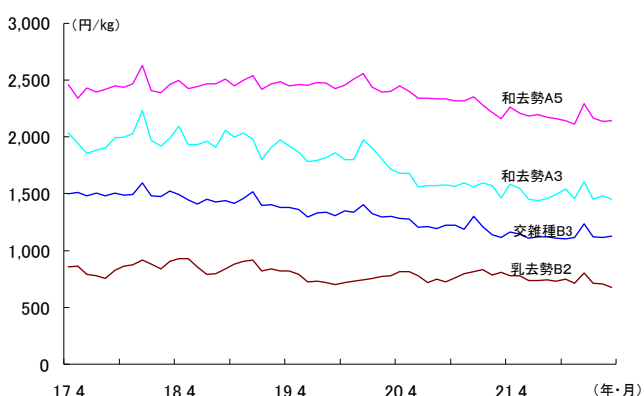


資料：農林水産省「食肉流通統計」

注1：省令規格は、去勢牛B2とB3の加重平均

注2：消費税を含む

図9 牛肉の卸売価格(東京・種別)



資料：農林水産省「食肉流通統計」

注：消費税を含む

## 省令規格

牛枝肉卸売価格(東京・省令)は、18年度以降低下傾向で推移し、21年度も景気低迷による消費者の低価格志向に伴い、比較的安価な輸入牛肉や豚肉などに需要がシフトしたことなどにより、1,015円/kg(▲5.1%)と4年連続で前年を下回った。

## 和牛

和牛(去勢)の卸売価格は、15年度以降は、と畜頭数の減少による生産減の影響もあり堅調に推移していたが、19年度には下落に転じた。20年度は、消費低迷も加わりA5が2,318円/kg(▲5.9%)、A3が1,584円(▲13.7%)といずれも低下し、21年度においても2,186円/kg(▲5.7%)、1,500円/kg(▲5.3%)と引き続き前年度を下回った。

## 乳牛

乳牛(乳用種去勢牛)の卸売価格は、19年度は消費の減少などから19年度以降前年割れが続き、21年度はB3が824円/kg(▲3.3%)、B2が742円/kg(▲4.9%)と、前年度をやや下回った。

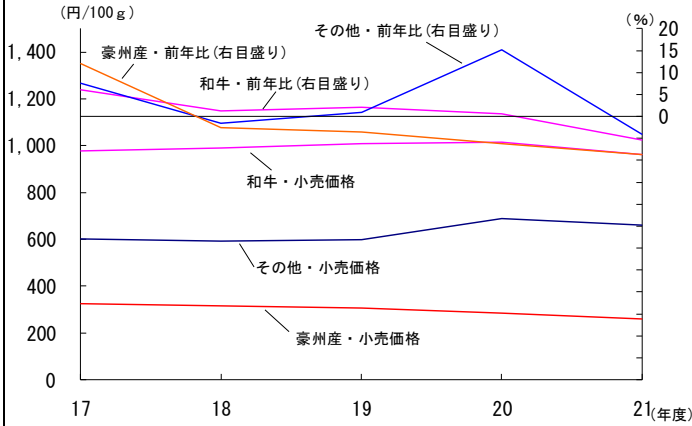
## 交雑種

交雑種の卸売価格は、と畜頭数の増加により18年度以降前年を下回って推移し、21年度においても交雑種去勢B3が1,133円/kg(▲6.9%)、B2が917円/kg(▲5.8%)といずれも前年度をかなりの程度下回った。

◆小売価格

和牛、国産（その他）および輸入品も低下

図10 牛肉の小売価格(サーロイン・特売価格)



資料：農畜産業振興機構調べ  
注：消費税は含まない。

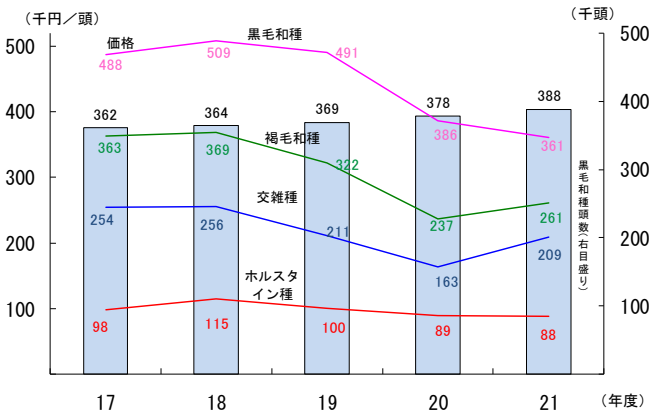
和牛の小売価格(サーロイン、特売価格)は米国産輸入牛肉の出回りが減少した16年度以降堅調に推移し、20年度は1,016円/100g(0.6%)となった。しかし、21年度は、低価格志向により高級な部位が敬遠されたことから962円/100g(▲5.3%)と14年以降初めて前年割れとなった。また、国産(交雑種)も661円/100g(▲4.1%)と値を下げた。

また、豪州産は21年度は、米国産との競合や円高で推移する為替相場の影響などから261円/100g(▲8.7%)と前年度をかなりの程度下回った(図10)。

◆肉用子牛

肉用子牛価格は、交雑種は取引頭数の減少などから大幅に上昇

図11 肉用子牛の市場取引価格と頭数(黒毛和種)



資料：農畜産業振興機構  
注：消費税を含む。

黒毛和種

黒毛和種の取引価格は、15年度以降堅調に推移し、18年度には過去10年間で最も高い水準を記録した。しかし、19年度以降は、枝肉卸売価格の低下などにより下落傾向となり、21年度は36万1千円(▲6.5%)と前年度をかなりの程度下回った。取引頭数は、17年度以降増加傾向で推移し、21年度は388,234頭(2.7%)と前年度をわずかに上回った。

褐毛和種

褐毛和種の取引価格は、19年度以降前年を下回って推移し、20年度は23万7千円(▲26.4%)とBSE発生時(13年度)の水準を下回ることとなった。しかし、21年度は上昇に転じ、26万1千円(10.0%)と前年をかなりの程度上回った。

### ホルスタイン種

ホルスタイン種の取引価格は、19年度以降、枝肉卸売価格の低下などから下落し、21年度は8万8千円(▲1.2%)と3年連続で前年度を下回った。

### 交雑種(F1)

交雑種(F1)の取引価格は、19年度以降前年を下回って推移し、20年度は16万3千円(▲22.7%)と前年を大幅に下回った。しかし、21年度は、取引頭数の減少と需要の増加などから20万9千円(27.6%)と大幅に上昇し、3年ぶりに前年度を上回った。



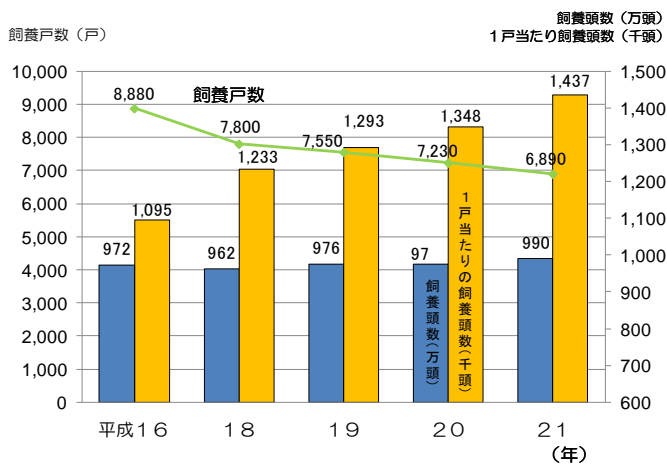
# 豚肉



## ◆飼養動向

21年2月現在の1戸当たり飼養頭数は1,437頭に(世界農林業センサスの調査年はデータなし)

図1 豚の飼養戸数および飼養頭数



資料：農林水産省「畜産統計」

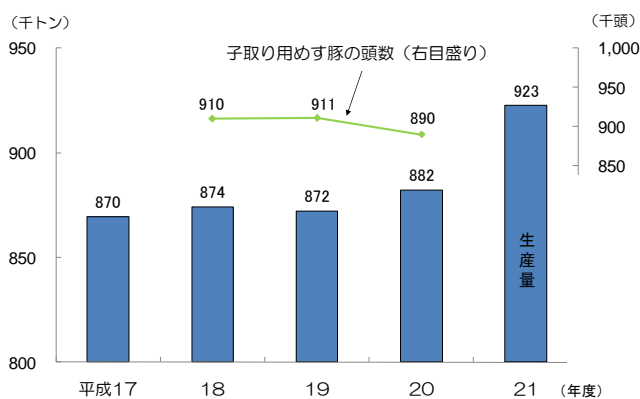
注1：各年2月1日現在

2：17年、22年は世界農林業センサスの調査年のためデータがない

21年2月1日現在の豚の飼養戸数は6,890戸(前年比▲8.7%)と小規模の飼養者層を中心に減少したが、飼養頭数は9,899千頭(同1.6%)と、堅調な卸売価格を反映して2年ぶりに前年を上回った。その結果、1戸当たりの飼養頭数は、前年に比べ89頭増えて1,437頭(同4.3%)となった(図1)。

## ◆生産 21年度は、92.3万トン(4.6%)と2年連続で増加

図2 豚肉生産量と子取り用めす豚の頭数



資料：農林水産省「畜産統計」、「食肉流通統計」

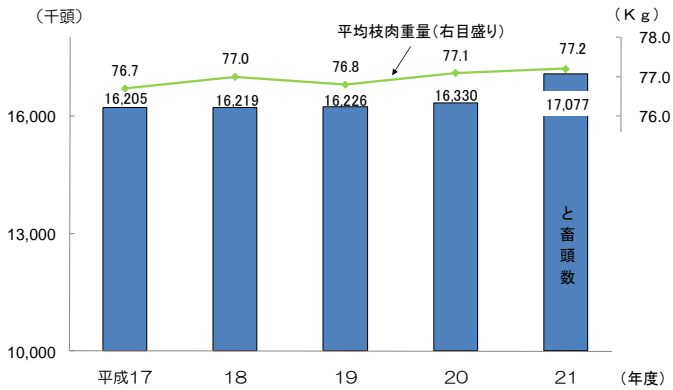
注1：生産量は、部分肉ベース

2：子取り用めす豚の頭数は、各年2月1日現在。17年、22年は世界農林業センサスの調査年のためデータがない

豚肉生産量は、夏期の暑熱の影響による子豚生産率の低下や子取り用めす豚頭数の減少などが影響し、19年度まではほぼ横ばいで推移してきた。20年度は堅調な卸売価格や衛生対策による事故率低減などから、前年度を上回り、21年度も引き続き、子取用めす豚頭数の増加や衛生対策の効果から前年度比4.6%増の92.3万トンと2年連続で前年度を上回った(図2)。

豚肉 [ 国内 ]

図3 豚のと畜頭数と平均枝肉重量



資料：農林水産省「食肉流通統計」

注：平均枝肉重量は全国平均

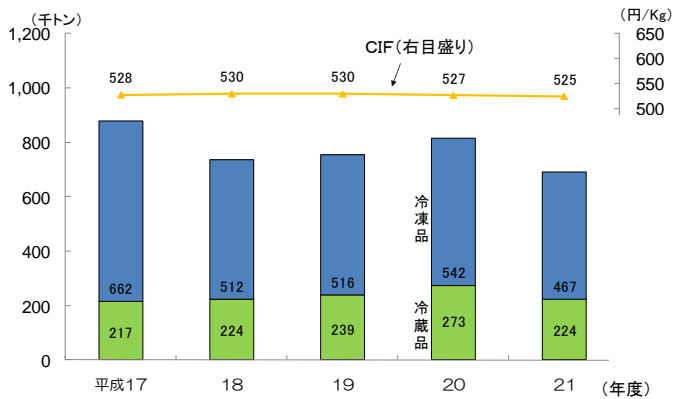
豚のと畜頭数は、18年度以降、堅調な豚肉需要を背景に増加傾向で推移し、21年度は17,077千頭(4.6%)となった。

21年度の平均枝肉重量は、暖冬の影響などから成育状況が良好となったほか、母豚の更新などにより大漢などの等外が増えたことから、平均77.2kg/頭(0.1%)と過去最高となった(図3)。

◆ 輸 入

輸入量は69万2千トン(▲15.1%)と3年ぶりに減少に転じる

図4 豚肉の冷蔵品、冷凍品別輸入量とCIF価格



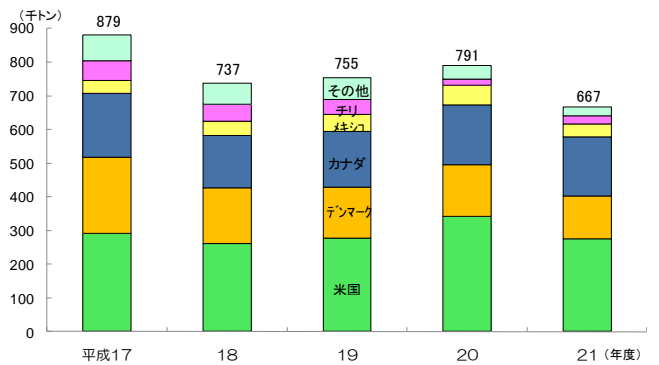
資料：財務省「貿易統計」

注：部分肉ベース

豚肉の輸入量は、国内外でのBSEや高病原性鳥インフルエンザ発生による牛・鶏肉の代替需要により増加傾向で推移してきた。18年度は期首推定在庫が高水準だったため輸入量は前年度を下回って推移、その後は景気低迷による低価格志向を背景に20年度まで2年連続で前年度を上回った。しかし、21年度は国内生産量の増加により国産冷凍品を中心に期首推定在庫が高水準だったため、加工仕向け

用としての輸入冷凍品の落ち込みが目立った。期首推定在庫は69万2千トン(▲15.1%)、内訳は、冷蔵品が22万4千トン(▲17.9%)、冷凍品が46万7千トン(▲13.7%)となった(図4)。

図5 豚肉の国別輸入量



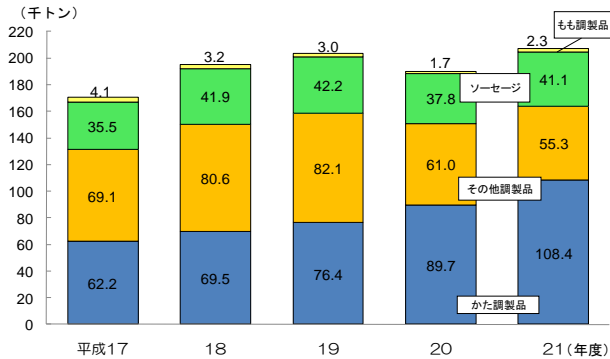
資料：財務省「貿易統計」

注：部分肉ベース

国別輸入量の推移をみると、21年度は、米国が28万トン(▲19.5%)と大幅に下回ったほか、カナダ17万トン(▲2.0%)、デンマーク13万トン(▲26.3%)、メキシコ4万トン(▲33.9%)と前年度を下回った。(図5)。

調製品

図6 豚肉調製品およびソーセージの輸入量



料：財務省「貿易統計」

注：もも調製品：1602-41-090

かも調製品：1602-42-090

その他調製品：1602-49-290

ソーセージ：1601-00-000

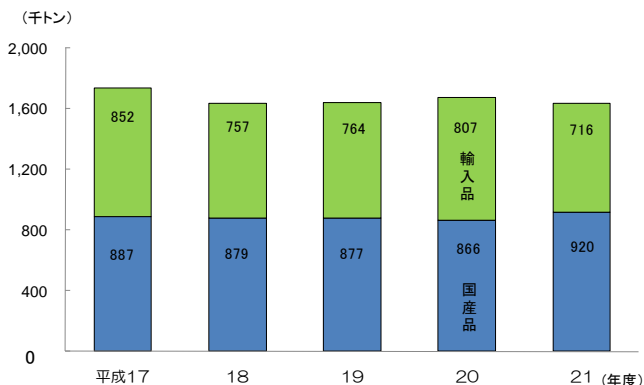
豚肉調製品(豚の肉またはくず肉のみから成るものを除く。)やソーセージは、19年度をピークに順調に輸入量を増加させてきたが、19年度後半に起きた中国産冷凍ギョーザ事件を契機に、20年度は中国産調製品を中心に減少に転じた。21年度は景気低迷による低価格志向を背景に、より安価な輸入品に頼る傾向が強くなり、調製品全体では16万6千トン(8.9%)、ソーセージは4万1千トン(8.7%)と前年度を上回って推移した(図6)。

◆消費

推定出回り量は、164万トン(▲2.2%)と3年ぶりに減少に転じる

推定出回り量

図7 豚肉の推定出回り量



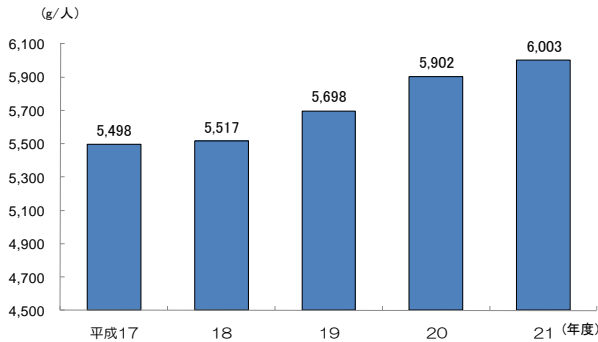
資料：農林水産省「食肉流通統計」,財務省「貿易統計」,農畜産業振興機構調べ

注：部分肉ベース

豚肉の推定出回り量は、19年度以降、増加傾向で推移し、安全性の重視、国産志向の高まりや、さらに21年度は国産品の枝肉卸売価格の低下などを背景に需要が高まったことから、21年度に92万トン(6.3%)と3年ぶりに前年度を上回った(図7)。しかし、輸入品が72万トン(▲11.3%)と前年度を下回ったことから、全体では164万トン(▲2.2%)と3年ぶりに減少に転じた。

家計消費

図8 豚肉の家計消費量(1人当たり)



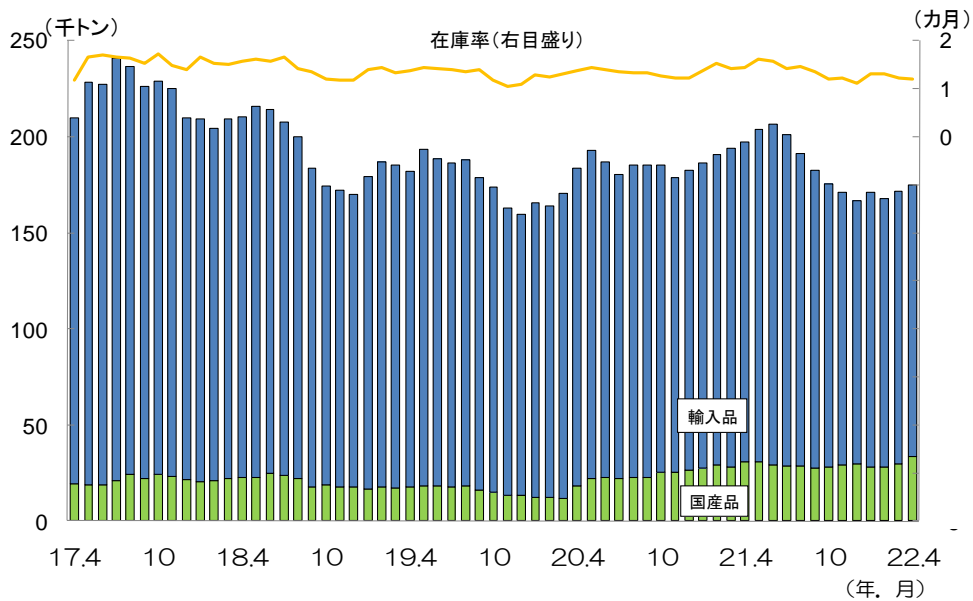
資料：総務省「家計調査報告」

18年以降の豚肉の家計消費量は、牛肉に比較して値ごろ感があることや国産品の小売価格などから堅調に推移し、21年度は豚肉の家計消費量は6,003g/人(1.7%)となった。しかし、小売価格の低下(100グラム当たり131円(▲5.3%)を反映し、金額ベースでは7,884円/人(▲3.7%)と前年を下回った。

◆在庫

21年度期末在庫は、2年ぶりに減少し17万2千トン(▲11.5%)

図9 豚肉推定期末在庫量と在庫率



資料：農畜産業振興機構調べ

注1：在庫率＝在庫量／推定出回り量

2：部分肉ベース

豚肉の推定期末在庫量は、19年度以降生産量は増加し、推定出回り量はほぼ横ばいに推移したことに伴い、20年度

の期首在庫量は19.4千トンと高水準であったが、国産卸売価格の低下に伴い、輸入量も減少、21年度の期末在庫量

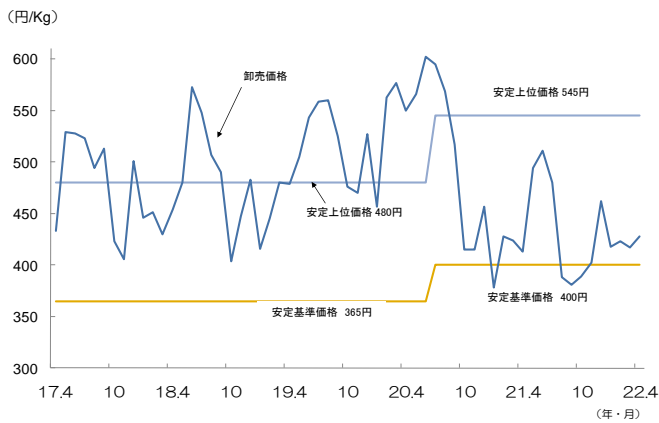
は 17 万 2 千トン(▲11.5%)まで取り崩しが行われた。内訳は、国産品在庫量は 3 万トン(7.4%)、輸入品在庫量が 14

万 2 千トン(▲14.7%)となった(図 9)。

### ◆枝肉卸売価格(東京・省令)

前年度を 60 円下回る 433 円/kg(▲12.2%)

図 10 豚肉の卸売価格(東京・省令)



資料：農林水産省「食肉流通統計」

注 1：消費税を含む

2：省令は、極上と上の加重平均

17 年度以降、季節的変動はあるものの、卸売価格はほぼ横ばいで推移していたが、19 年度後半から家計消費や業務用需要が増加し、さらに 20 年度前半は中国産冷凍ギョーザ事件を契機に、国産志向が高まったことから、600 円/kg を超える記録的な高値をつけた。20 年度後半以降、生産量の増加と景気低迷などにより、価格は軟調に推移し、21 年秋には 300 円台後半まで値を下げた。このため、畜産業振興事業に基づく調整保管が 6 年ぶりに実施された。民間団体が行う国産豚肉の保管について、その経費の一部を当機構が補助するもので、約 7 万頭規模で実施した結果、卸売価格(東京・省令)は、6 月に 511 円/kg まで回復し、21 年度の平均卸売価格(同)は、433 円/kg(▲12.2%)(同)となった(図 10)。

### ◆小売価格

21 年度の小売価格、前年度から値下がり

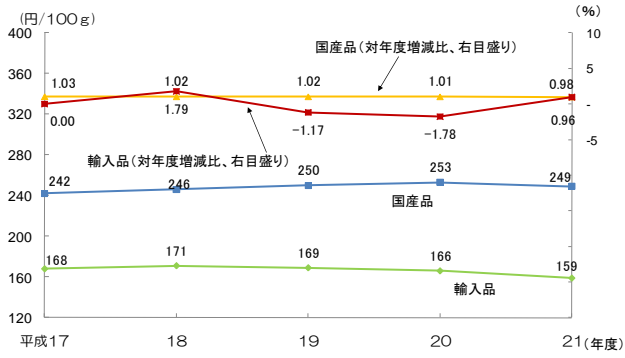
「ロース」の小売価格(通常価格)は、21 年度は、国産品は 249 円/100g(▲1.6%)、輸入品は 159 円/100g(▲4.2%)となった。国産品は生産量の増加による卸売価格の低下を反映し、輸入品は安価な国産品に比較しさらに値を下げた(図 11)。

また、「ロース」の小売価格(特売価格)は、21 年度は、国産品は 185 円/100g(▲7.0%)とピークとなった 20 年度から値下がりした。輸入品についても前年度をかなり大きく下

回り、100 円を切る 99 円/100g(▲13.9%)と、景気低迷を背景として値下がりした。(図 12)。

豚肉 [ 国内 ]

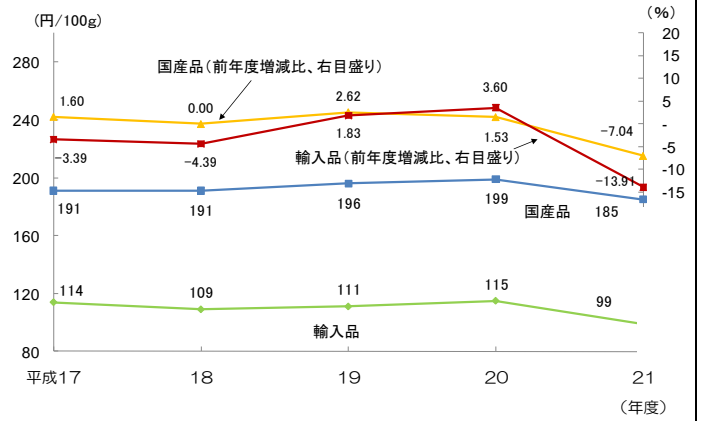
図11 豚肉(ロース)の小売価格(通常価格)



資料：農畜産業振興機構調べ

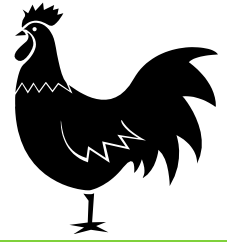
注：消費税は含まない。

図12 豚肉(ロース)の小売価格(特売価格)



資料：農畜産業振興機構調べ

注：消費税は含まない。

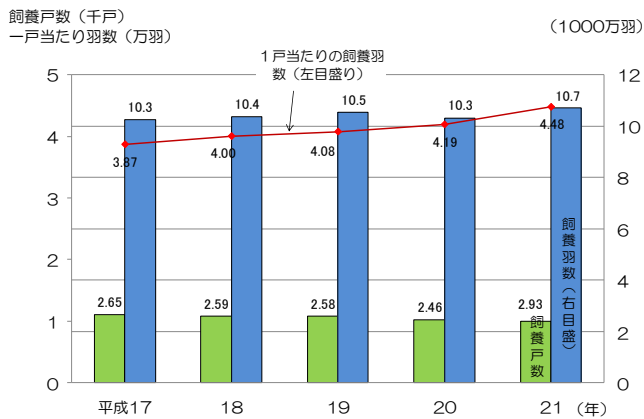


# 鶏肉

## ◆飼養動向

21年2月のブロイラー飼養羽数は、1億714万羽と前年を4.0%上回る(21年データは未公表)

図1 ブロイラーの飼養戸数および飼養羽数



資料：農林水産省「平成21年食鳥流通統計調査結果の概要」

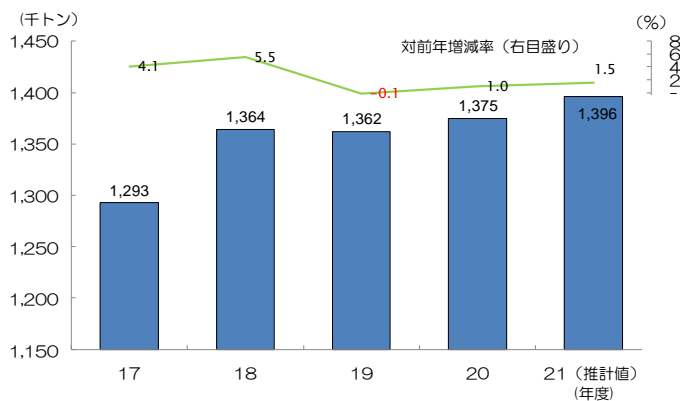
注：数値は各年の2月1日現在、22年データは未公表

ブロイラーの飼養羽数は、18年以降20年を除き増加傾向で推移し、21年は4.0%増となった。飼養戸数は、小規模飼養者層を中心に引き続き減少し、21年には2,392戸(前年比▲2.6%)となった。1戸当たりの飼養羽数は、大規模飼養者層が増えたことを反映し増加傾向で推移しており、21年は4.5万羽(6.9%)とかなり増加した(図1)。

## ◆生産

21年度の鶏肉生産量は、139万6千トン(推計)と前年度を1.5%上回る

図2 鶏肉の生産量



資料：農林水産省「食肉流通統計」、農畜産業振興機構推計

注：骨付き肉ベース

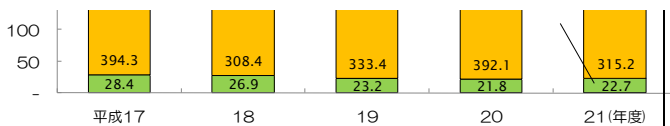
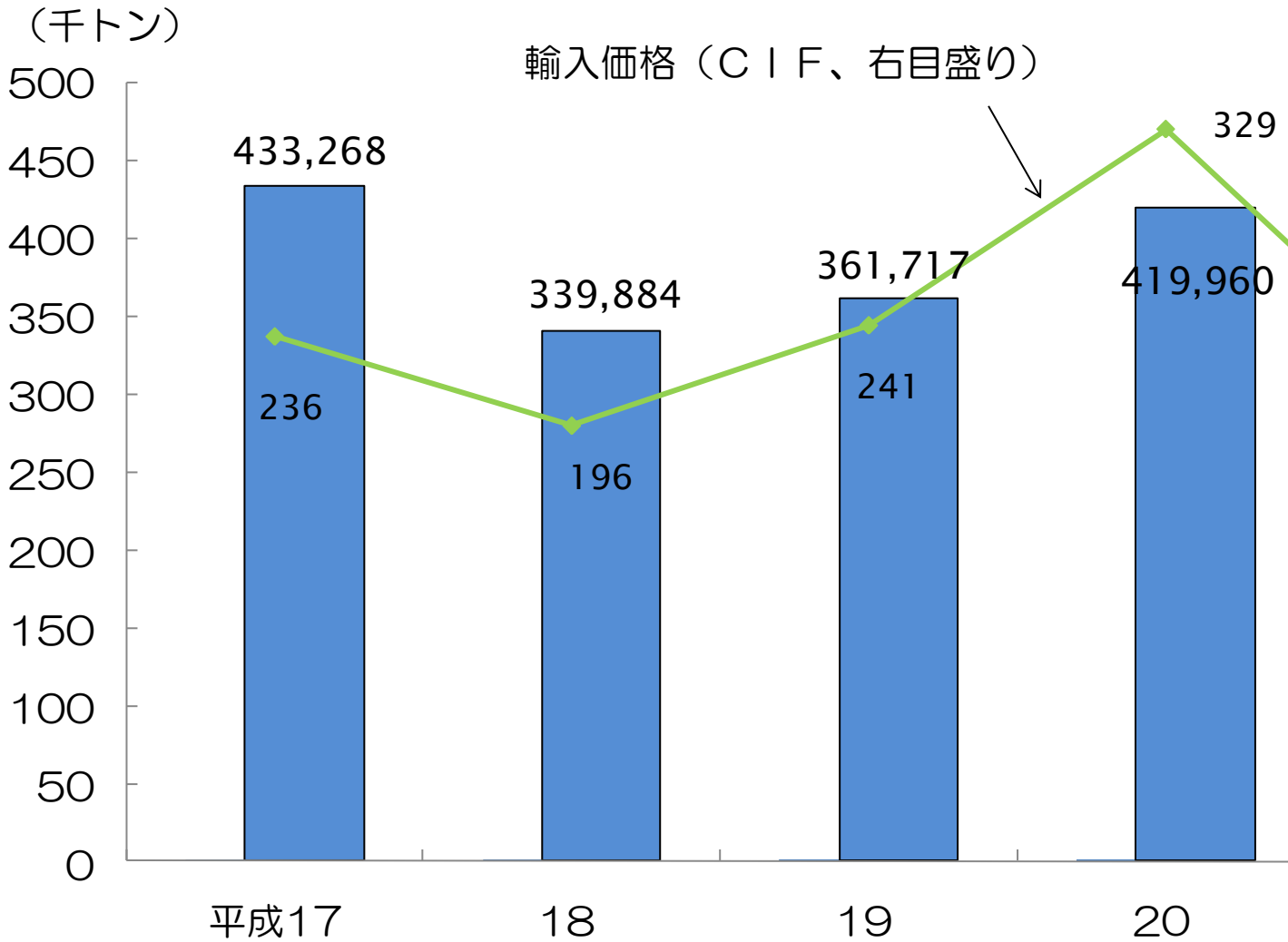
鶏肉の生産量は、国内外でのBSE発生による代替需要や、海外での高病原性鳥インフルエンザの発生による輸入量の減少などから増産意欲が高まり、18年度は国産志向の高まりなども相まって、ともに4%を超える高い伸び率となり、19年度は137万2千トン(0.5%)、20年度は138万6千トン(1.0%)となった。根強い国産志向に加え景気の低迷による安価な鶏肉への需要も高まったことなどから、21年度(推計値)はさらに上回り139万6千トン(1.5%)となった。

◆輸 入

21年度の輸入量は、前年度を大幅に下回る、34万3千トン(▲18.3%)

図3 鶏肉の輸入量

鶏肉の輸入量は、そのほとんどが冷凍品で、業務、加工



資料：財務省「貿易統計」



鶏肉 [ 国内 ]

調製品

図5 鶏肉調製品の国別輸入量

鶏肉調製品(焼き鳥、チキンナゲット、唐揚げなど)の輸入量は、安い素材を求める外食・業務用製品向けとして、中国、

鶏肉輸入量の対前年増減率 (右目盛り)

(千トン)

400

鶏肉調製品輸入量の対前年増減率(右目盛り)

350

300

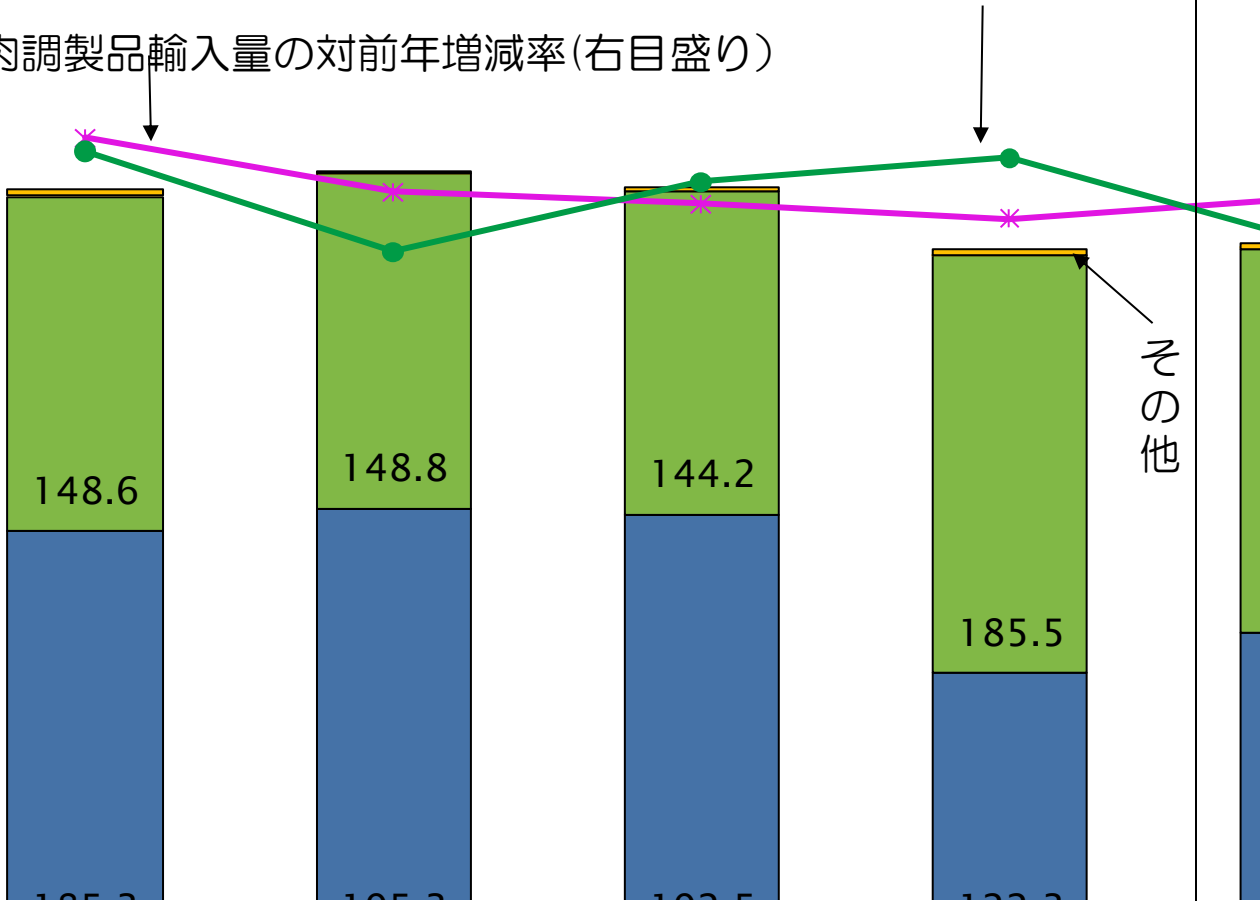
250

200

150

100

50



その他

(千トン)

2,000

1,800

1,600

1,400

1,200

1,000

800

600

400

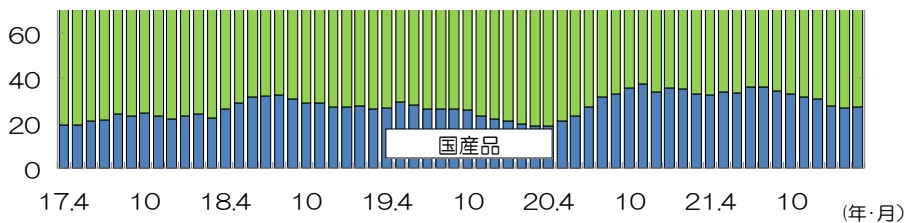
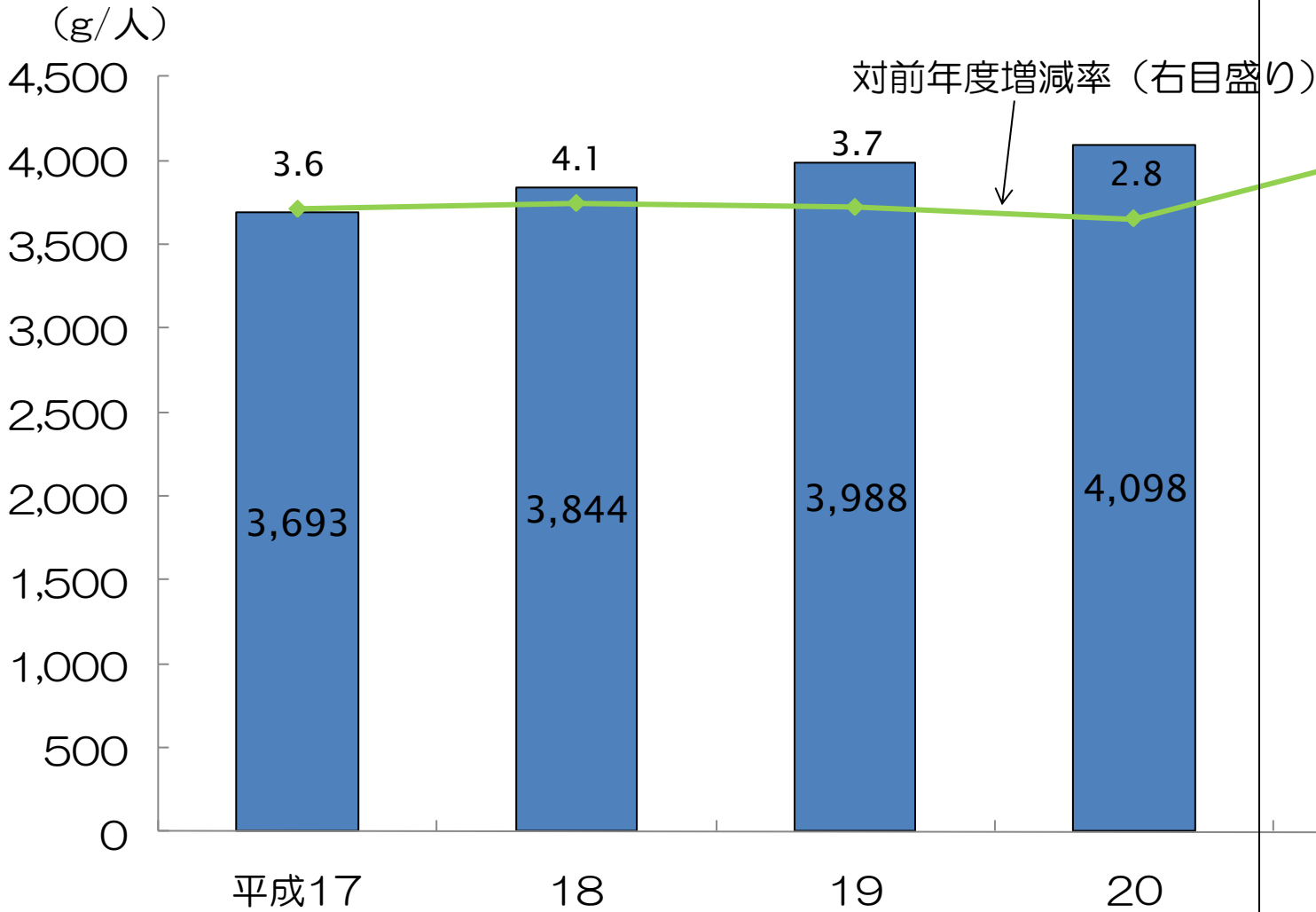


◆家計消費

21年度の家計消費量はほかの他の食肉を上回る伸び率(8.9%増)

図7 鶏肉の家計消費量(1人当たり)

鶏肉の家計消費量は、16年度以降堅調に推移しており、



資料：農畜産業振興機構調べ

注：在庫率=在庫量/推定出回り量

鶏肉 [ 国内 ]

鶏肉の推定期末在庫量は、輸入量の変動を大きく反映している。18年度はブラジル産の輸入量が大幅に減少(▲21.8%)したことが影響し、全体の在庫量もかなりの程度減少した(▲16.6%)。19年度は前年を下回った(▲4.2%)が、20

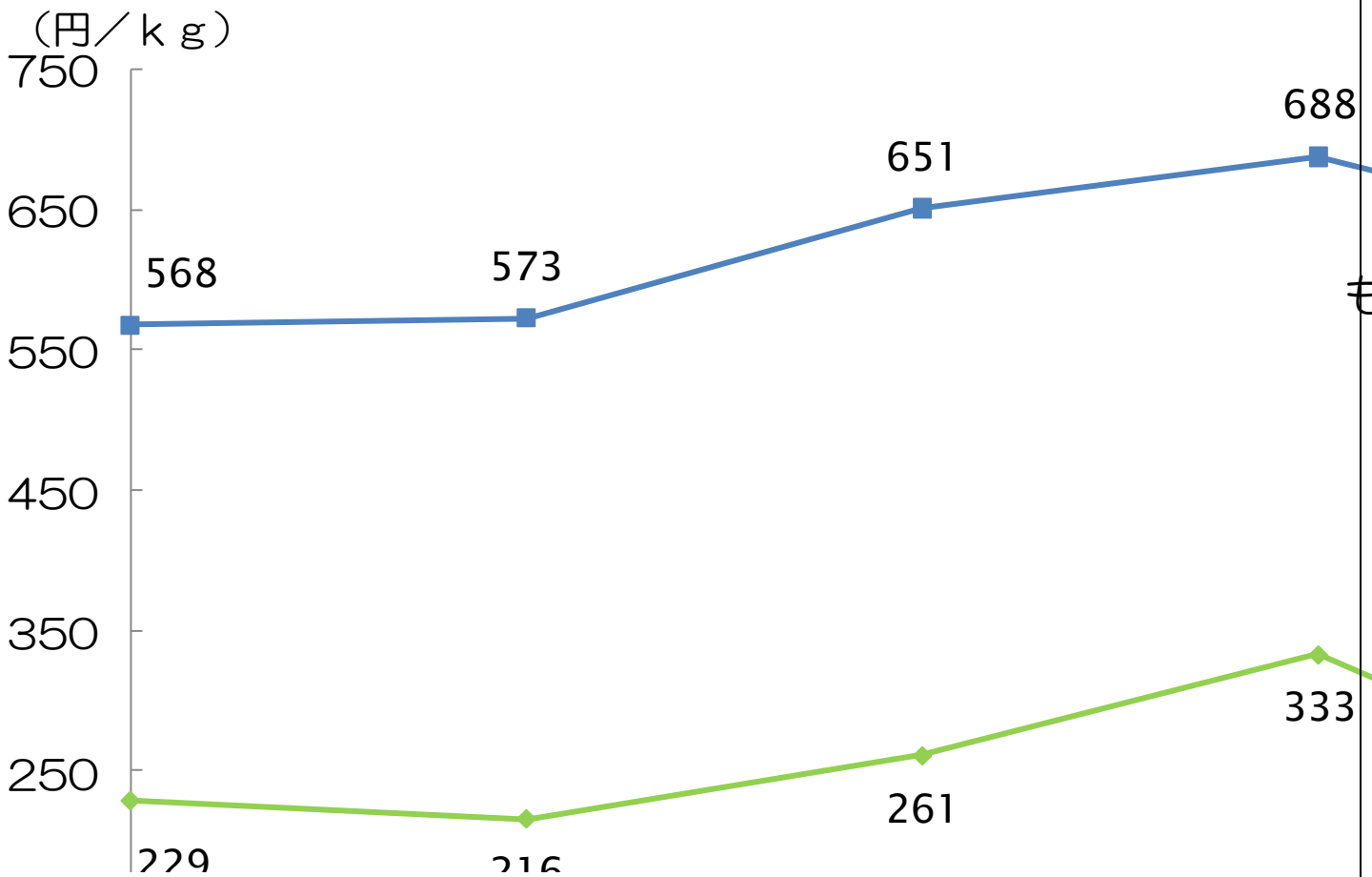
年度は、前年度からのブラジル産の輸入急増により在庫が積み増され、前年度を大幅に上回った(37.0%)。21年度は大量の期首在庫を受けて、輸入量が抑えられたことから、11万トン(▲28.9%)となった(図8)。

◆卸売価格

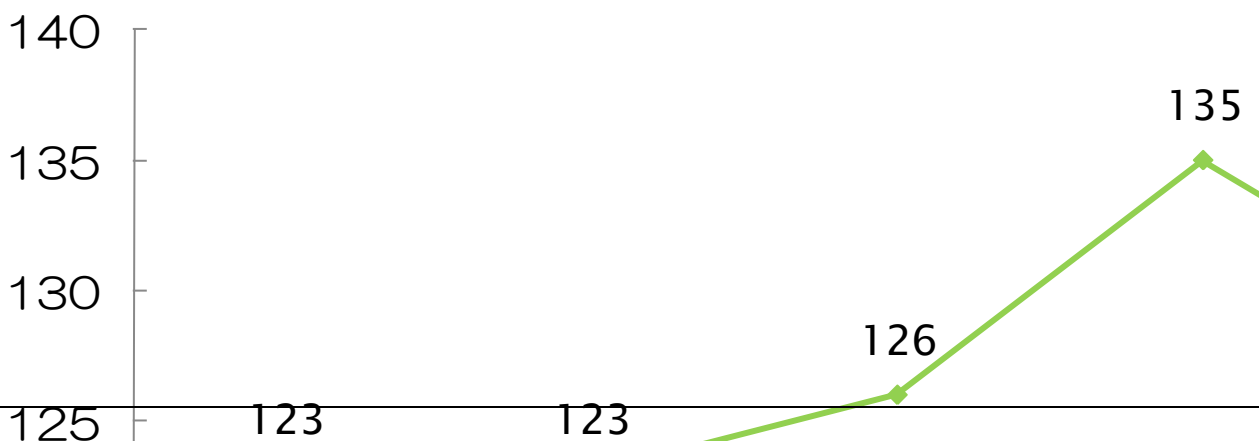
21年度はもも肉(▲10.3%)、むね肉(▲36.6%)、ともに下落

図9 国産鶏肉の卸売価格

国産鶏肉の卸売価格(ブロイラー卸売価格・東京)のうち、



(円/100g)



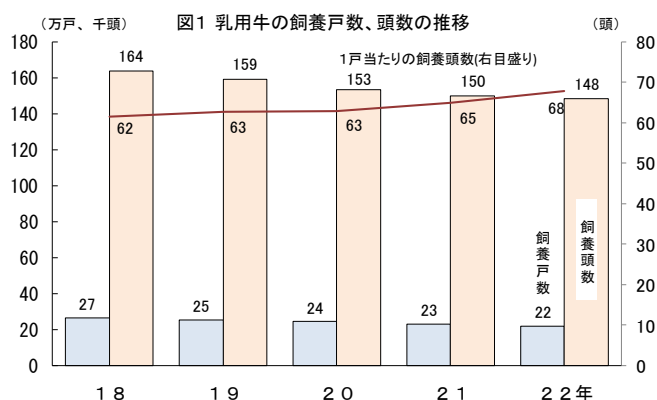


# 牛乳・乳製品



## ◆飼養動向

22年2月の乳用牛飼養頭数は148万頭(▲1.1%)



資料：農林水産省「畜産統計」

注：各年2月1日現在。なお、平成22年は概数値

乳用牛の飼養頭数は、平成5年以降、減少傾向で推移しており、22年には1,484千頭(▲1.1%)と前年をわずかに下回った。

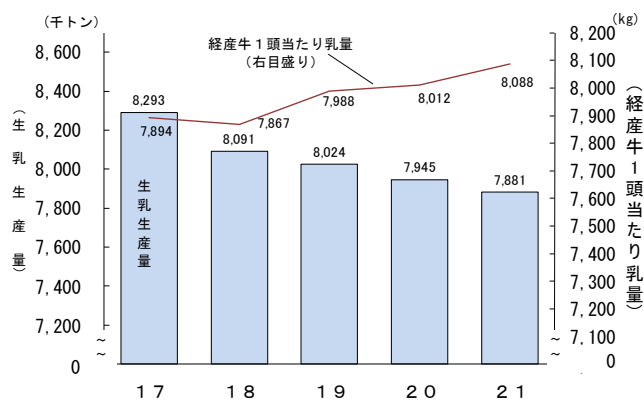
飼養戸数は、飼養者の高齢化による廃業に加え21年の配合飼料価格の高騰による収益性の低下の影響を受け、22年には前年を1,200戸下回る21,900戸(▲5.2%)となった。

1戸当たりの飼養頭数は、小規模飼養者層の減少および大規模飼養者層の増加により規模拡大が進んだ結果増加傾向にあり、22年は前年をわずかに上回る67.8頭(4.5%)となった(図1)。

## ◆生乳生産量

21年度の生乳生産量は788万1千トン(▲0.8%)と前年度を下回る

図2 生乳生産量と経産牛1頭当たり乳量(全国)

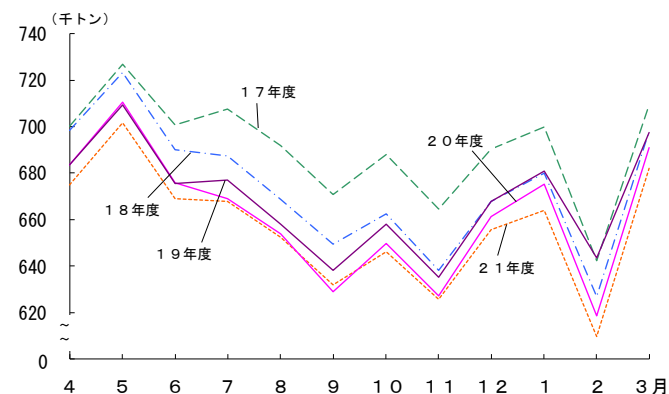


資料：農林水産省「畜産統計」、「家畜の飼養動向」及び「牛乳乳製品統計」

注1：平成21年度の生乳生産量、経産牛1頭当たり乳量は概数値。

2：経産牛の飼養頭数は各年2月1日現在。

図3 生乳生産量



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

注：平成21年度は概数値

生乳生産量は、平成元年度の806万トン以来800万トン台を維持し、ピーク時の8年度は約870万トンを記録したが、それ以降都府県での減少により、減少傾向で推移してきた。

19年度は、前年度に引き続き減産計画が実施された中チーズやクリームなど乳製品向け需要が増加したものの、都府県を中心に飼料価格の高騰などの影響を強く受け、生乳生産量は前年同月を下回って推移した。結果、全国では802万4千トン(▲0.8%)となった。20年度は、前年度後半からの飼料価格の高騰などにより、主に都府県の酪農家数

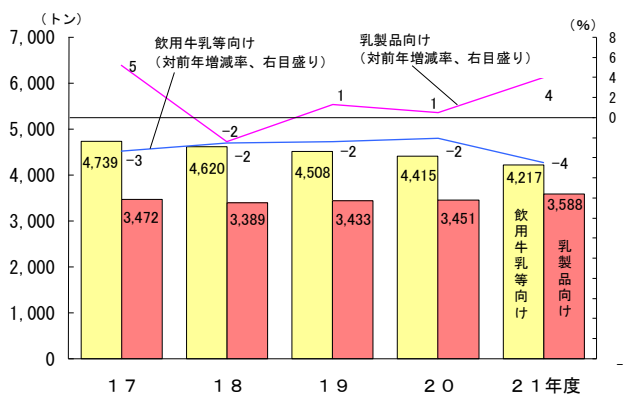
が急激に減少したことが影響し、前年度を1.0ポイント下回る794万4千トン(▲0.1%)と20年ぶりに800万トンを下回った。21年度は前年度に引き続き都府県で減産が続く中で、飲用牛乳の消費低迷も加わり、前年度を0.8ポイント下回る7,88万1千トンと2年連続で800万トンを下回った。

全国の経産牛1頭当たり乳量を見ると、19~21年度は3年連続で前年度を上回り、21年度は8,088キログラムとなっており、全国的に規模の増大に伴って1頭当たり乳量も増加する傾向がみられる(図2)。

## 牛乳等向け処理量

21年度の飲用牛乳等向け処理量は、7年連続減少し421万7千トン(▲4.5%)

図4 用途別処理量



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

注：平成22年度は概数値。

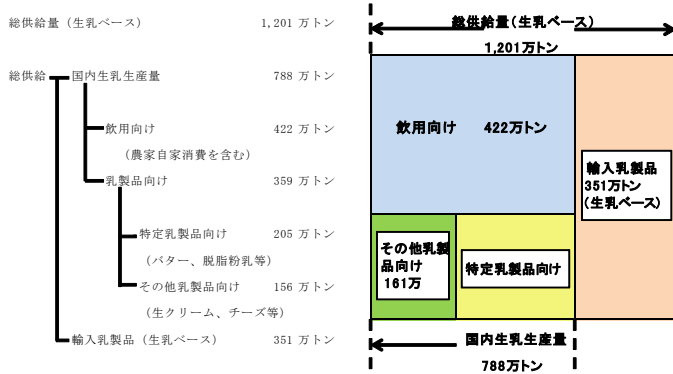
飲用牛乳等向け処理量は、その消費動向を反映して推移しているが、その他飲料との競合などから消費が伸びず、6年度をピークにおおむね減少傾向で推移している。19年度は低脂肪牛乳などの成分調整牛乳の需要が拡大し、乳飲料の生産量が前年度を上回ったものの、引き続きその他飲料との競合により消費は伸び悩み、450万8千トン(▲2.4%)と前年度をわずかに下回った。20年度においても、引き続き減少し、441万2千トン(▲2.1%)とわずかに下回った。21年度は天候不順から減少傾向に拍車がかかり、牛乳生産

量が過去5年間と比べると2割減と大幅な減少となったことから、飲用牛乳等向け処理量は421万7千トン(▲4.5%)とやや下回り、7年連続の減少となった(図4)。

乳製品向け処理量

21年度の乳製品向け処理量は、3年連続増加の358万8千トン（4.0%）

図5 生乳の需給構造の概要（平成21年度）



資料：農林水産省生産局「生産者補給金単価等算定説明資料」  
注：四捨五入の関係で、必ずしも計が一致しないことがある。

乳製品向け処理量は、牛乳等向け処理量が減少する中前年を上回って推移し、19年度は、クリーム、チーズ向けな

どその他乳製品向けが増加した結果、343万3千トン(1.3%)となった。20年度も前年度に引き続きクリームやチーズなど向けが増加したことから345万1千トン(0.5%)とわずかに上回った。21年度は10月にチーズ向け乳価が引き下げられ、輸入品との競争力が増したことから下、358万8千トン(4.0%)と前年度をやや上回った。

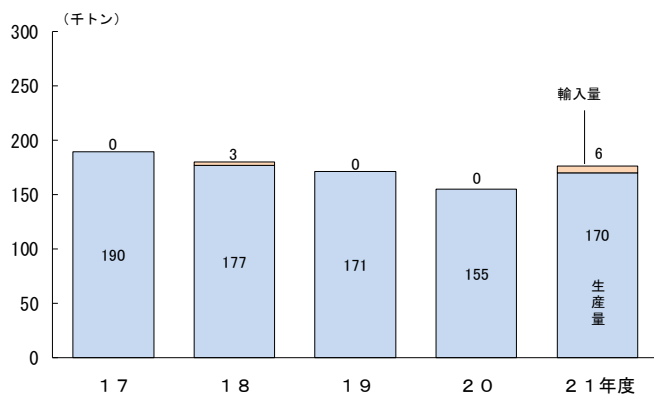
21年度の総供給量は、国内生乳生産が788万トン、輸入乳製品(生乳ベース)が351万トンとなった。国内生産量のうち、飲用向けに54%、乳製品向けに46%が供給された(図5)。

◆乳製品

脱脂粉乳

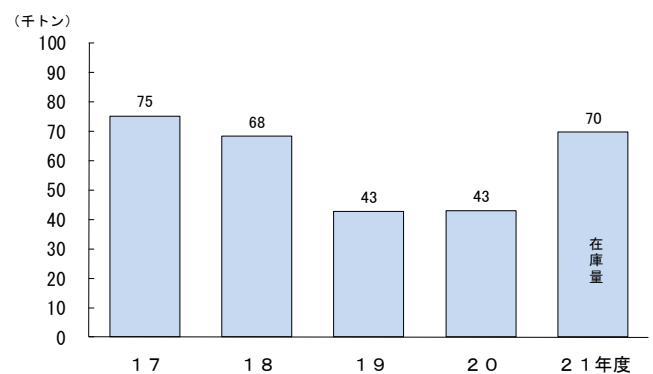
21年度の期末在庫は前年度を大幅に上回り、大口需要者価格は前年度をわずかに下回る

図6 脱脂粉乳の生産量・輸入量



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」  
注：輸入量は機構輸入分のみ。なお、平成21年度は概数値

図7 脱脂粉乳の推定期末在庫量



資料：農林水産省生産局畜産部牛乳乳製品課調べ。  
19年1月以降は、農林水産省「牛乳乳製品統計」

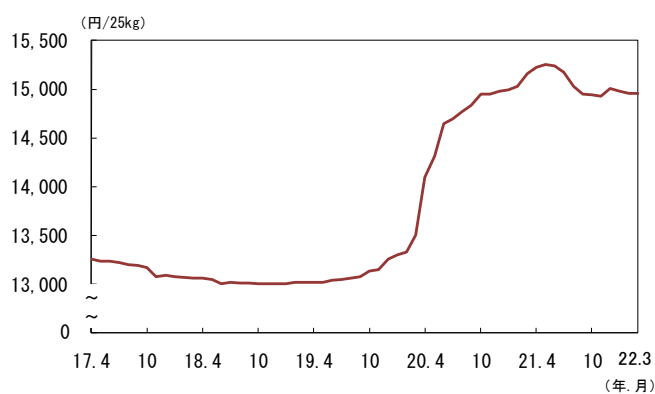
脱脂粉乳の生産量は、14年度以降、需給が緩和し、過剰在庫の解消が課題とされていたことを背景に減少傾向で推移している。これに生乳生産量の減少などの要因が加わり、18年度は以降3年連続で前年度を下回った。しかし、21年度は牛乳等向け処理量の減少が続く中、長期保存が可能な脱脂粉乳に加工され増加傾向で推移し、17万トン(9.6%)と前年度をかなりの程度上回った(図6)。

また、推定期末在庫量は、新規用途の開発、輸入調製品や飼料用との置き換えなど在庫削減対策が講じられた結果、

19年度は4万3千トンと8年ぶりの4万トン台となった。20年度は4万3千トン(0.7%)国際価格の急落に伴う輸入品需要の増加により、前年度をわずかに上回った。21年度は需給の緩和から高水準で推移し、7万トン(61.7%)と大幅な増加となった(図7)。

21年度の推定出回り量を見ると、低調な需要を反映し15万トン(▲3.6%)とわずかに下回り、ここ10年間で最も少ない水準となった。また、カレントアクセス分の輸入量は6,138トンであった。

図8 脱脂粉乳の大口需要者価格



資料：農林水産省生産局調べ。

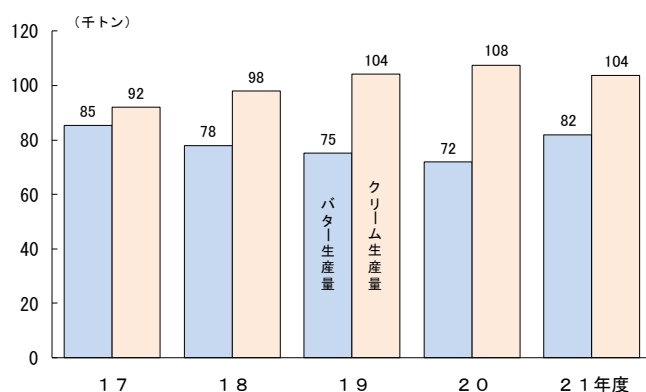
注：消費税を含む。

脱脂粉乳の大口需要者価格は、19年度については生産量の減少に加え、海外の乳製品価格の上昇の影響を受け、国産に対する需要が高まって在庫水準が低下したため価格が上昇、6年ぶりに前年度を上回る13,162円/25kg(1.1%)となり、20年度は乳製品の国際需給がひっ迫し、国際価格が高騰し、国産の需要が高まったことから14,785円/25kg(12.3%)と前年度を上回って推移した。21年度は在庫量の増加から下期に入って前年割れとなっており、10月には2年5カ月ぶりに前年同月を下回ったものの、年度平均では15,054円/25kg(1.8%)と前年度をわずかに上回った(図8)。

## バター

21年度の推定期末在庫量は前年度を大幅に上回り大口需要者価格は前年度をわずかに下回る

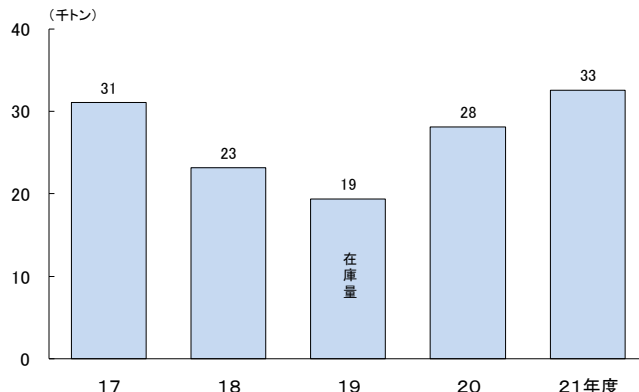
図9 バター、クリーム生産量



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」

注：輸入量は機構輸入分のみ。なお、21年度は概数値。

図10 バターの推定期末在庫量



資料：農林水産省生産局畜産部牛乳乳製品課調べ

20年1月以降は、農林水産省「牛乳乳製品統計」

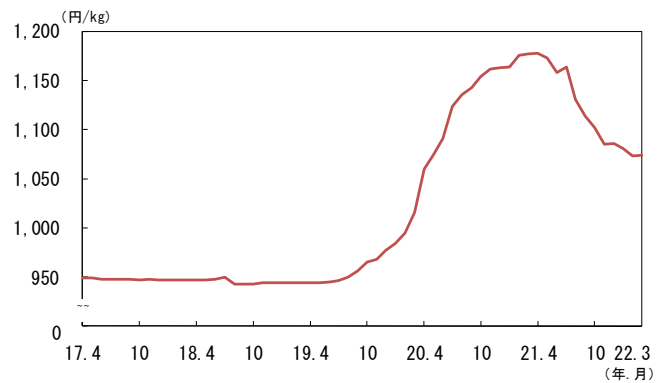


バターの生産量は、19年度は引き続き生乳生産量が減少し、7万5千トン(▲3.8%)、20年度は生乳生産量が減少する中、クリーム向けが好調だったことを背景に減少し、7万2千トン(▲4.3%)となった。21年度は、乳価値上げに伴う小売価格の上昇から牛乳消費が減少し、バターに仕向けられる生乳が増加したことなどを受け、8万2千トン(14.0%)と前年度からかなり大きく増加した。

クリーム等の生産量は、18年度以降、業務用向けの需要が好調なことを受け、前年度をかなりの程度上回る水準で推移しており、19年度が10万4千トン(6.4%)、20年度は10万8千(3.2%)となったが、21年度は景気低迷と低脂肪製品への移行による生クリーム需要の減少などにより10万4千トン(▲3.6%)と減少に転じた(図9)。

バターの推定期末在庫量は、飲用牛乳等の需要動向に左右されながら、増減を繰り返して推移しているが、19年度は、前年度を4千トン下回る1万9千トンとなった。これは、生産量の減少に加え、中国やロシアでの需要増加や、豪州の大干ばつによる供給減少によって乳製品の国際市況が高騰し、国産品の需要が増加したことなどにより、家庭用バターについては、店頭の商品が薄くなり大きく報道されたため、購入量が増えたことも、在庫量減少に拍車をかけたものとみられる。20年度は、景気の悪化により、マーガリンなどへの切り替えが進み需要が落ち込んでいることなどから前年度を9千トン上回る2万8千トンと増加した。21年度は生産量の増加により引き続き高い水準で推移し、前年度を4.5千トン上回る32,600トン(16.0%)となった(図10)。カレントアクセス分の輸入量の実績はなかった。

図11 バターの大口需要者価格



資料：農林水産省生産局牛乳乳製品調べ。

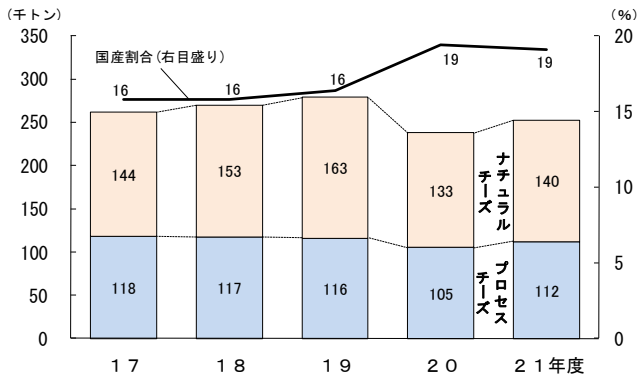
注：消費税を含む。

バターの大口需要者価格は、19年度は生産量の減少に加え、海外市場で需給ひっ迫による高値相場が続いたことから国産需要が強まり、966円/kg(2.2%)となった。20年度は1,135円/kg(17.5%)と前年度に引き続き高値傾向で推移したが、21年度は生産量、在庫量ともに増加したことを反映し、低下傾向で推移し1,118円/kg(▲1.5%)と3年ぶりに前年度割れに転じた(図11)。

◆チーズ

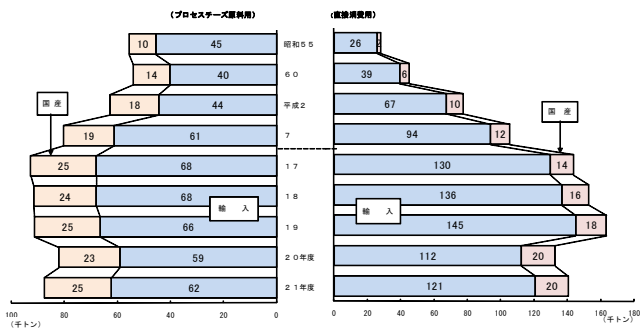
21年度の総消費量は増加に転じ、25万31千トン(6.2%)

図 12 チーズの総消費量と国産割合



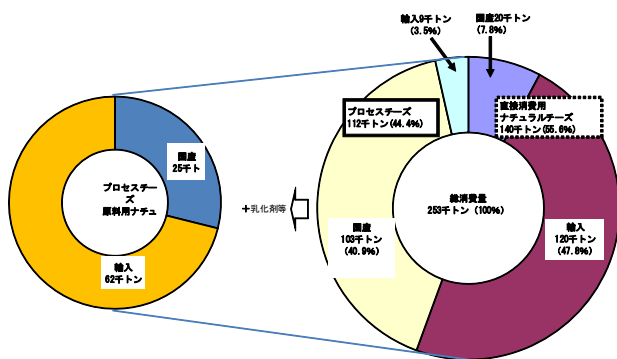
資料：農林水産省生産局畜産部牛乳乳製品課調べ

図 13 ナチュラルチーズの生産量・輸入量



資料：農林水産省生産局畜産部牛乳乳製品課調べ

図 14 21年度のチーズ総消費量の内訳



資料：農林水産省生産局畜産部牛乳乳製品課調べ

注：直接消費用ナチュラルチーズとは、プロセスチーズ原料用以外のものを指し業務用その他原料用を含む。以下のグラフについても同様。

チーズの総消費量(ナチュラルチーズとプロセスチーズ)は、増加傾向で推移し、19年度は過去最高の27万9千ト

ン(3.4%)となったが、20年度は国際価格高騰などに伴い価格改定や容量変更が行われた上、世界的な経済不況により家庭用や外食用の消費が冷え込んだことによるものであり、23万8千トン(▲14.8%)と10年前の水準(10年度23万4千トン)まで落ち込むこととなった。21年度は、国際価格が下落し輸入量が増加したことや製品価格の値下げと内食化の進展もあり需要は回復し25万3千トン(6.2%)と2年ぶりの増加となったが、景気の低迷により依然として外食需要が低調であったため、過去最高であった19年度と比べると90%の水準にとどまった(図12)。

プロセスチーズの消費量は、18年度以降微減傾向3年連続で前年度を下回ったが、21年度は11万2千トン(6.6%)と増加に転じた。一方、直接消費用ナチュラルチーズ(プロセスチーズ原料用以外のものを指し、業務用その他原料用を含む)は、18年度以降2年連続で前年度を上回って推移していたが、20年度は、秋以降の世界的な景気失速に伴う不況で家庭用や外食用の消費の落ち込みが大きく影響し、13万3千トン(▲18.8%)と大幅な減少をなした。21年度は前年度から一転して増加に転じ、14万トン(6.0%)となったものの、この水準は15年度をやや下回る水準にとどまっている。

国産ナチュラルチーズの生産量は、堅調な需要の拡大を背景に17年度以降増加傾向で推移し、21年度は4万5千トン(4.50%)と、北海道のチーズ工場が生産能力を強化したこともあり、18年度から5年連続で前年度を上回った。このうちプロセスチーズ原料用は、おおむね2万トン前後で推移し、21年度は2万5千トン(10.5%)となった。

一方、直接消費用は、17年度以降着実に増加していたものの、21年度は19,729トン(▲2.4%)と減少に転じた(図13)。

ナチュラルチーズの輸入量は、おおむね 18～20 万トン台で推移しており、21 年度は国際価格の下落もあり 18 万 3 千トン(6.7%)と大きく減少した前年度から増加した。

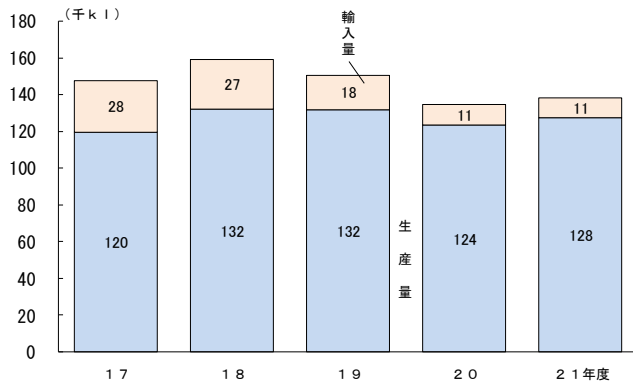
このうち直接消費量は 12 万 1 千トン(7.5%)、プロセスチーズ原料用は 62,237 トン(5.4%)といずれも前年度を上回って推移した(図 14)。

なお、21 年度のチーズ総消費量における国産の割合は 19.1%と前年度より 0.3 ポイント低下した一方、プロセスチーズ原料用に占める国産の割合は 28.9%と 1.0 ポイント上昇した。

## ◆アイスクリーム

21 年度の生産量はやや増加の 12 万 8 千 KL(3.3%)

図 15 アイスクリームの生産量と輸入量



資料：農林水産省「牛乳乳製品統計」、財務省「貿易統計」

注：輸入量は、1t=1.455klで換算。なお、平成 21 年度は概数値

アイスクリームは、近年、豊富な品揃えにより、女性を中心に購買頻度が高まっている。生産量は 19 年度は夏場は前年を上回って推移したものの、冬場は前年を割り込んだため 13 万 2 千キロリットル(▲0.1%)とほぼ前年並みにとどまり、20 年度は 12 万 4 千キロリットル(▲6.4%)とほぼ年間を通して前年割れで推移したが、21 年度は 12 万 8 千キロリットル(3.3%)と 3 年ぶりに前年を上回った。

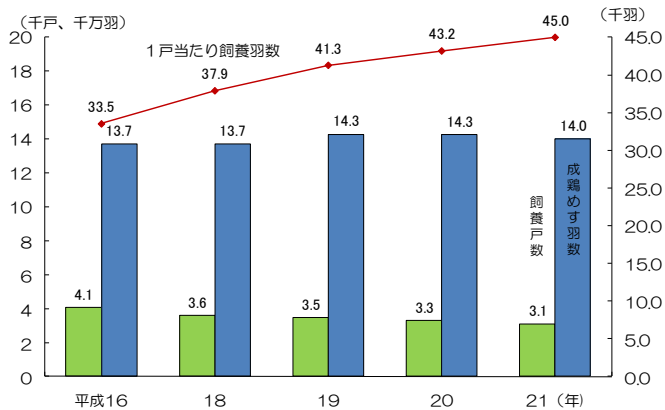
輸入量は、17 年度以降減少傾向で推移しており、19 年度は輸入価格の上昇を背景に、前年度を大幅に下回る 12,713 トン(▲31.2%)、20 年度は 7,731 トン(▲39.2%)、21 年度は 7 千 3 百トン(▲5.7%)となった(図 15)。

# 鶏卵



◆飼養動向 21年2月の採卵鶏の飼養羽数は1億4千万羽(▲1.8%)と緩やかな減少  
(世界農林業センサスの調査年はデータなし)

図1 採卵鶏の飼養戸数、成鶏めす羽数



資料：農林水産省「畜産統計」、「家畜の飼養動向」

注

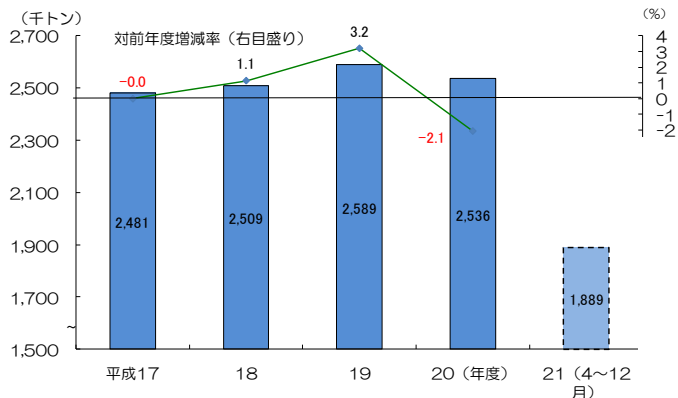
- 1：数値は各年の2月1日現在
- 2：成鶏めすとは種鶏を除く6カ月以上のめすをいう。
- 3：飼養戸数は、種鶏およびひな(6カ月未満)のみの飼養者および成鶏めす羽数1千羽数未満の飼養者を除く。
- 4：17年及び22年は世界農林業センサスの調査年であるため比較できるデータがない。

21年2月現在の採卵鶏の飼養戸数は、3,110戸で前年より190戸(▲5.8%)減少した。また成鶏めす羽数については、年々減少傾向にあり、21年は1億4千万羽(▲1.8%)と減少した。一方、1戸当たりの成鶏めす羽数は10万羽以上の規模の飼養羽数が増加していることから、21年は45.0千羽(4.1%)と約1.8千羽増加した(図1)。

## ◆生産

21年度(4~12月)の生産量は188万9千トン(21年度データは未公表)

図2 鶏卵の生産量



世界的に鳥インフルエンザが猛威をふるう中、国内でも鳥インフルエンザ発生が影響し、鶏卵生産量は、一時的に低下した。しかし17年度以降回復に向かい、19年度は258万7千トン(3.1%)とピークに達した。しかし、卸売価格が下落したことから、20年度は253万2千トン(▲2.1%)となった。

21年度(4~12月)は前年度をわずかに下回る188万9千トンとなった(図2)。

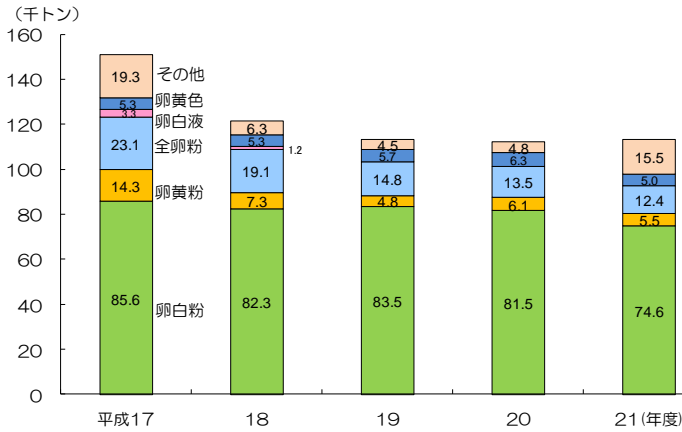
資料：農林水産省「鶏卵流通統計」

注：21年度のデータは23年2月現在未公表

◆ 輸 入

21年度の輸入量(殻付き換算ベース)は、10万815トン(▲10.1%)と減少

図3 鶏卵の輸入量



資料：財務省「貿易統計」  
注：殻付き換算ベース

鶏卵の輸入量(殻付き換算ベース)は通常、国内需要量の3~5%程度を占めるが、国内の生産量、価格動向、円相場などの影響を受けて変動する。

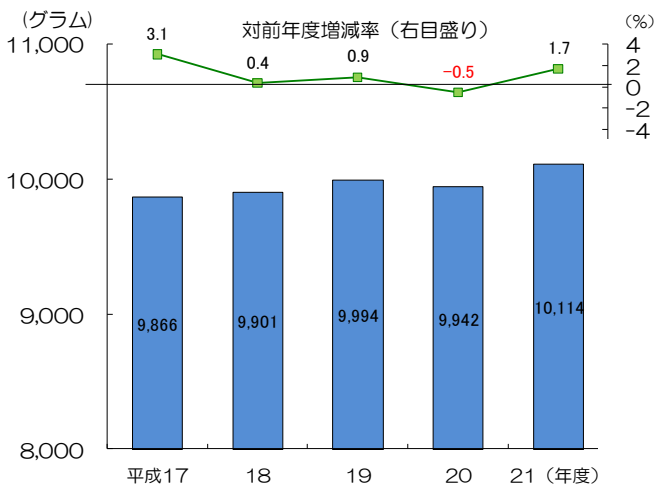
20年度は輸入品に対する安全面での警戒感などが影響し112,198トン(▲1.0%)とわずかに減少した。

21年度は前年度に比較して卸売価格が安価で推移したことなどから国産品への需要が高まり、100,815トン(▲10.1%)と減少した(図3)。主な輸入先はオランダ、米国、メキシコなどであった。

◆ 消 費

21年度の家計消費量(1人当たり)は、10,114グラム(1.7%)と増加に転じる

図4 鶏卵の家計消費量(1人当たり)



資料：総務省「家計調査報告」

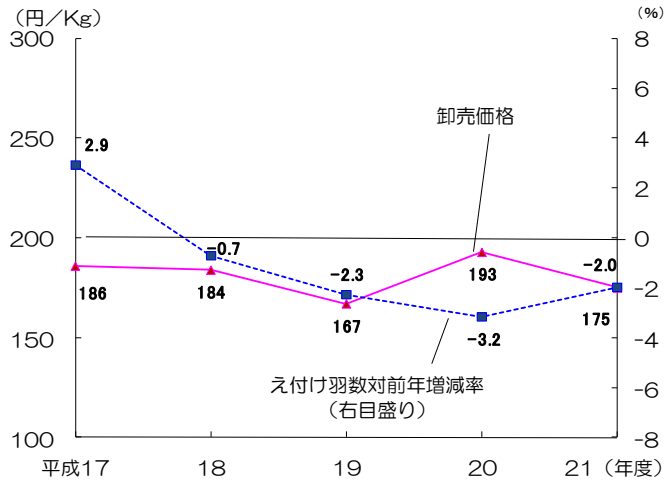
1人当たりの家計消費量は、16年度以降10キログラムを切って推移、20年度は卵価が上昇したことなどもあり9,942グラム(▲0.5%)となった。

21年度は卵価が前年度を下回ったことや、厳しい経済情勢の下、より安価な畜産物への需要が高まったことにより、10,114グラム(1.7%)と前年度を上回り、6年ぶりに10キログラムを超えた(図4)。

◆卸売価格

21年度の卸売価格(東京・M)は、キログラム当たり175円(▲9.3%)と前年度を下回る

図5 鶏卵の卸売価格(東京M)とひなのえ付け羽数



資料：農林水産省「鶏ひなふ化羽数」(21年12月まで)  
 日本種鶏卵協会「種鶏卵統計」(22年1月以降)  
 農林水産省「鶏卵市場流通統計」(8年12月まで)  
 農林水産省「鶏卵流通統計」(9年1月以降)

鶏卵は自給率が約95%と高いため、卸売価格は、生産量の変動が大きく影響する傾向にある。鶏卵の卸売価格の動き(対前年度増減率)を見ると、昭和55年度、60年度、平成2年度、8年度、11年度、16年度とほぼ5年周期でピークを迎えている。この周期的変動には、ひなえ付け羽数が大きく影響している。高卵価に刺激され、え付け羽数が増加すると、生産量が増加し、卵価の低落を招いている。

20年度の鶏卵卸売価格は193円(15.3%)(東京・Mサイズ、キログラム当たり)と、減羽などに努め高水準で推移した16年度の205円に次ぐ高値となった。

21年度は175円(▲9.3%)と前年度を下回った。経済情勢が厳しい中、卵価が軟調に推移したため、卵価安定基金※から多額の価格差補てん金が交付され、卵価安定基金の財源は15年度以来、6年ぶりに払底した(図5)。

※(社)全国鶏卵価格安定基金および(社)全日本卵価安定基金に置かれる基金のこと。

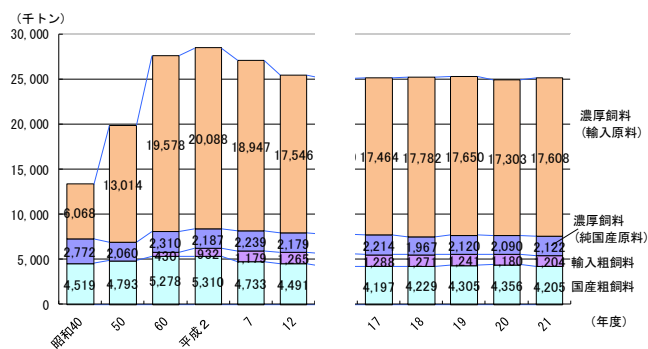
## 飼料



## ◆飼料需要量の推移

21年度の飼料自給率は横ばいで推移

図1 飼料需給量(TDNベース)

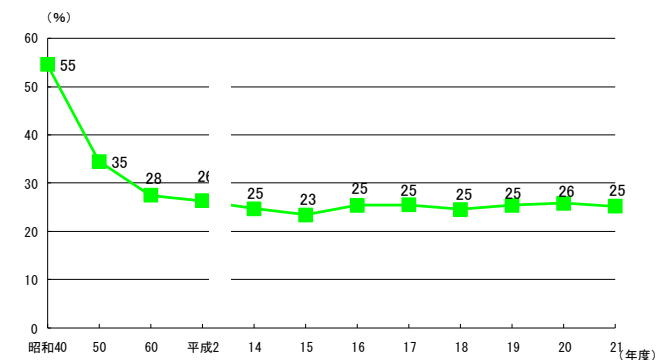


資料：農林水産省生産局畜産部畜産振興課

飼料の需要量は近年、家畜の飼養頭羽数の減少などを反映して、減少傾向で推移していたが、平成17年度には下げ止まり、わずかに上昇傾向に転じた。21年度(概数)の飼料需要量は、前年と比較して豚やブロイラーの飼養頭羽数が増加したことから、前年度を0.8%上回る2万5千TDNトンとなった(図1)。

注1:「TDN」とは、家畜が消化できる養分を数値化した「可消化養分総量」のこと。

図2 純国内産飼料自給率



資料：農林水産省生産局畜産部畜産振興課

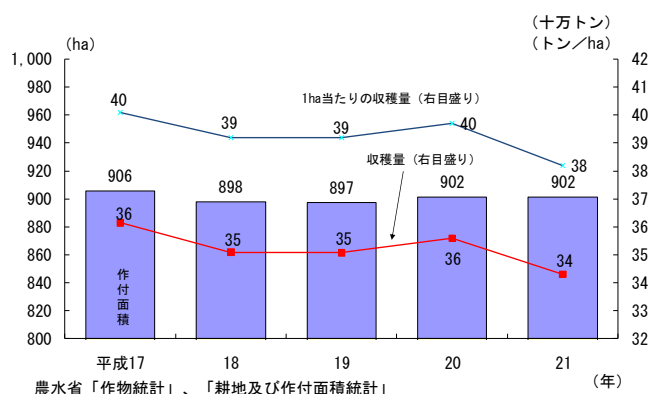
飼料の自給率を見ると、21年度(概算)の純国内産飼料自給率(国産粗飼料+濃厚飼料(純国内産原料)/総需要量)は、前年度1.0ポイント減の25%となった。その内、粗飼料自給率は前年度1.0ポイント減の78%となり、濃厚飼料自給率は前年度と同水準の11%となった。なお、「食料・農業・農村基本計画」における32年度の純国内産飼料自給率目標は38.0%である(図2)。

注2: 濃厚飼料の「純国内産原料」とは、国内産に由来する濃厚飼料(国内産飼料用小麦・大麦等)である。濃厚飼料「輸入原料」には、輸入食料原料から発生した副産物(輸入大豆から搾油した後発生する大豆油かす等)も含む。

## ◆飼料作物の生産

平成 21 年の収穫量は、前年並み

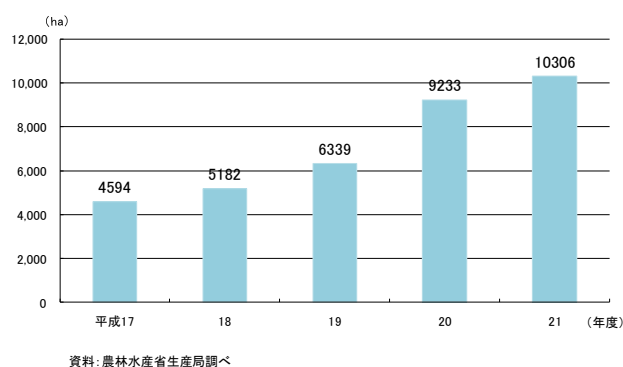
図3 飼料作物の生産



飼料作物の作付面積は、近年畜産農家戸数の減少に加え、草地(離農跡地)が畜産経営に円滑に継承されなかったなどから、微減傾向で推移していた。しかし、20年の作付面積は、90万2千ヘクタール(0.5%)と前年を上回り、21年(速報値)においても、前年水準を維持した。

飼料作物の収穫量(TDNベース)は、作付面積と単収の伸び悩みから、近年、横ばいないし減少傾向で推移しており、21年も作付面積は前年並みとなったものの、天候不順の影響により単収が前年を下回り、3,431千トン(▲3.6%)となった。(図3)

図4 稲発酵粗飼料の作付面積



稲発酵粗飼料の作付面積は、17年度は、飼料作物への転作が進み、前年度をわずかに上回った。18年度からは、飼料増産行動計画に基づく取り組みの強化などから、前年度を大きく上回っており、21年度は飼料増産行動計画に基づく取組の強化などにより10,306ヘクタール(前年度比11.6%増)となった(図4)。

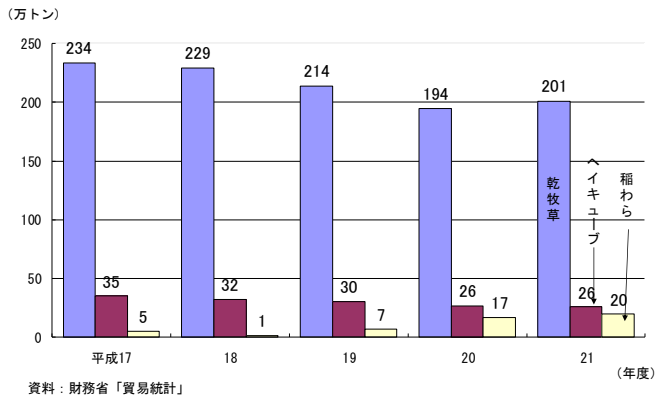
また、飼料用米の作付面積は、輸入トウモロコシとの価格差から一部の付加価値的な取組にとどまっており、作付面積は低調であったが、国際穀物価格の高騰、水田対策による支援の充実などにより急速に拡大しており、21年度は4,129ヘクタール(156%)となった。



## ◆粗飼料の輸入

平成 21 年の輸入量は、引き続き前年度を上回る

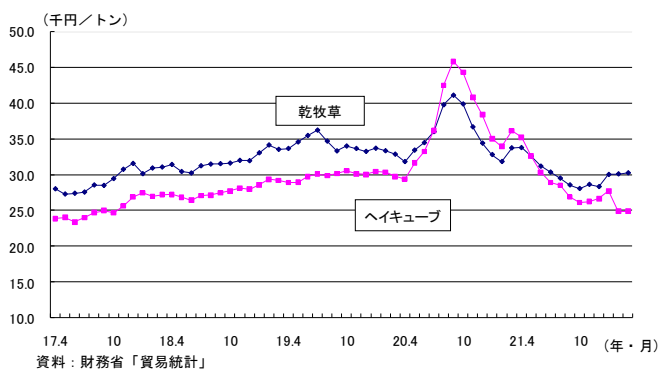
図5 粗飼料の輸入量



粗飼料の輸入量(TDNベース)のうちヘイキューブは、15年度以降前年度を下回って推移しており、21年度は、前年度をやや下回る25万6千トン(▲3.4%)と減少した。

乾草は18年度以降3年連続で前年度を下回って推移していたが、21年度は増加に転じ200万8千トン(3.3%)となった。稲わら(朝鮮半島、中国および台湾から輸入された穀物のわら、もみ)は、20年度は、19年8月に中国産稲わらの輸入停止措置が解除されたこともあり、輸入停止以前の水準にはないものの、前年度を大幅に上回り、21年度においても引き続き前年度を上回って推移した(図5)。

図6 粗飼料の輸入価格

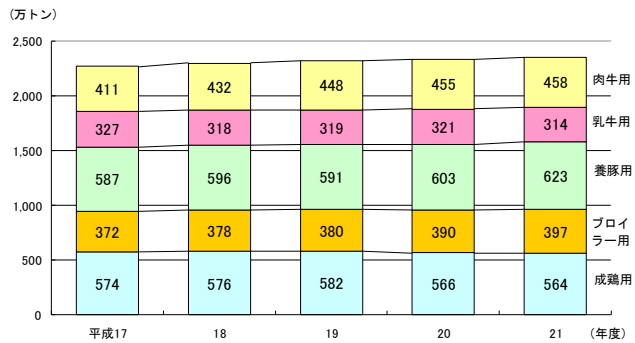


輸入価格(CIF)については、20年度のヘイキューブ、乾草の輸入価格は、気候変動による産地価格の高騰などに加え、国際的なバイオエタノールの需要の増加に伴い、産地においてトウモロコシなどへの作付け転換が行われたことにより生産量が減少したことなどから急激に上昇したが、その後、国際相場や海上運賃が大幅に下落したことなどから急落し、21年度はほぼ平年並みの水準で推移した(図6)。

## ◆配合飼料の生産

21年度の生産量は前年度を0.9%上回る2435万トン

図7 配合飼料の生産量



資料：農林水産省「流通飼料価格等実態調査」

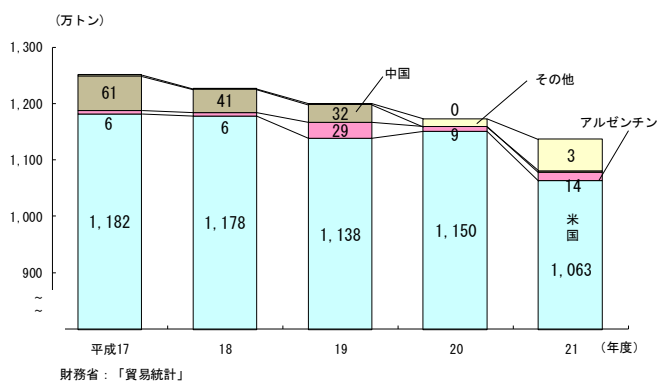
配合飼料の生産量は、近年は2400万トン前後で推移しており、21年度は、前年度を0.9%上回る2435万トンとなった。

畜種別に見ると、養鶏用、養豚用、肉牛用はそれぞれ前年度をわずかに上回る0.6%増、3.3%増、0.6%増となったが、乳牛用は前年度をわずかに下回る2.2%減となった。(図7)。

## ◆飼料用トウモロコシの輸入

輸入価格は前年度を大幅に下回る

図8 飼料用トウモロコシの輸入量



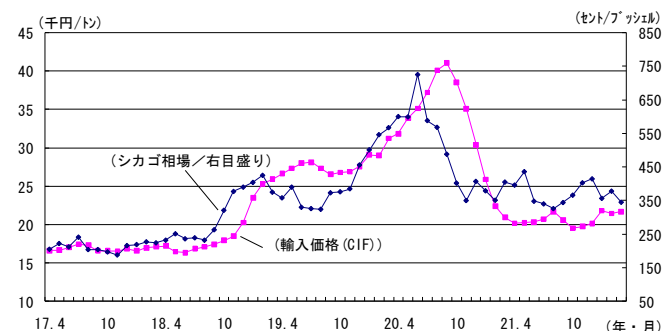
財務省：「貿易統計」

配合飼料の原料穀物(トウモロコシ、こうりゃん、大麦、小麦など)は、そのほとんどを海外に依存しており、トウモロコシは輸入量全体の約7割を占める。

トウモロコシの輸入量は18年度以降、減少傾向で推移しており、21年度は前年度を3.0%下回る1136万トンとなった。

21年度の輸入量を国別に見ると、最大の米国産が前年度を7.6%下回る1,063万トン、アルゼンチン産は同62.2%増の14万トンとなった(図8)。

図9 トウモロコシの価格



資料：財務省「貿易統計」、日本経済新聞（シカゴ相場、先物、期近価格）  
注：トウモロコシ1ブッシェル（約36リットル）は約25.4g

トウモロコシの輸入価格は国際価格（シカゴ相場、期近物）の影響により大きく変動した。

トウモロコシの国際価格（シカゴ定期相場）は、20 年秋以降、上半期の高騰から一転し、バイオエタノール需要の減少や金融危機による投機資金の流出、米国の主産地における豊作、穀物需要の減退懸念などを受け下落した。21 年度の平均では、前年度を大幅に下回るトン当たり 20,562 円（37.3%安）となった。（図 9）。

## ◆配合飼料価格

### 配合飼料工場渡価格は大きく下落

表 配合飼料の価格（建値）改定及び補てん状況

（単位：円/トン）

適用期間	価格改定額 （対前期差）	補てん単価		
			通常	異常
17年度 第1四半期	+	1,200	-	-
	+	900	-	-
	▲	800	-	-
	+	1,200	1,350	1,350
18年度 第1四半期	据置	700	700	-
	▲	500	-	-
	+	1,700	1,600	1,600
	+	5,500	6,500	4,640 1,860
19年度 第1四半期	+	3,200	8,200	4,371 3,829
	+	1,100	7,650	4,553 3,097
	▲	400	5,550	5,550 -
	+	3,900	7,800	7,800 -
20年度 第1四半期	+	4,500	10,500	8,983 1,517
	+	1,500	7,400	4,002 3,398
	+	2,500	7,650	5,252 2,398
	▲	12,200	-	- -
21年度 第1四半期	▲	4,200	-	- -
	+	2,800	-	- -
	▲	1,400	-	- -
	▲	500	-	- -

資料：農林水産省調べ

注：価格改定額は、全農のもの

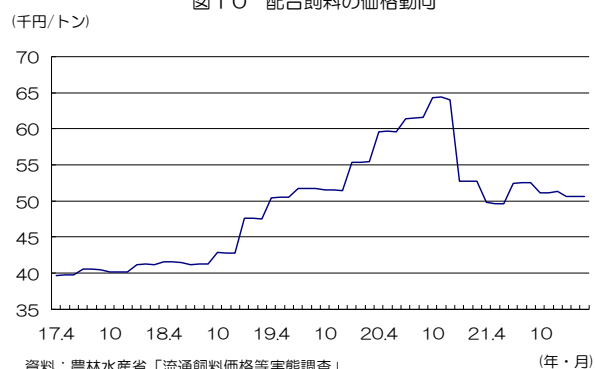
配合飼料価格は、飼料穀物の国際相場、海上運賃、為替レートなどの動向を反映して形成される。21 年度の工場渡し価格は、前年度を 14.3% 下回るトン当たり 50,999 円となった。

一方、畜産経営においては、生産費に占める配合飼料費の割合が高いことから、配合飼料価格の上昇が畜産経営に

及ぼす影響を緩和するため、昭和 43 年に創設された民間の自主的な積み立てによる通常補てん制度と、昭和 49 年度には通常補てんでは対処し得ない異常な価格高騰に対応するために国の支援による異常補てん制度が措置されている。

近年の補てん状況は、通常補てんが 18 年 10～12 月以降 9 期連続して発動し、異常補てんが 19 年 1～3 月期以降 3 期連続および 20 年 4～6 月期以降 3 期連続して発動された。21 年 1～3 月期以降は飼料価格が低下したため、発動されていない（図 10）。

図 10 配合飼料の価格動向



資料：農林水産省「流通飼料価格等実態調査」  
注：全畜種加重平均の配合飼料工場渡価格